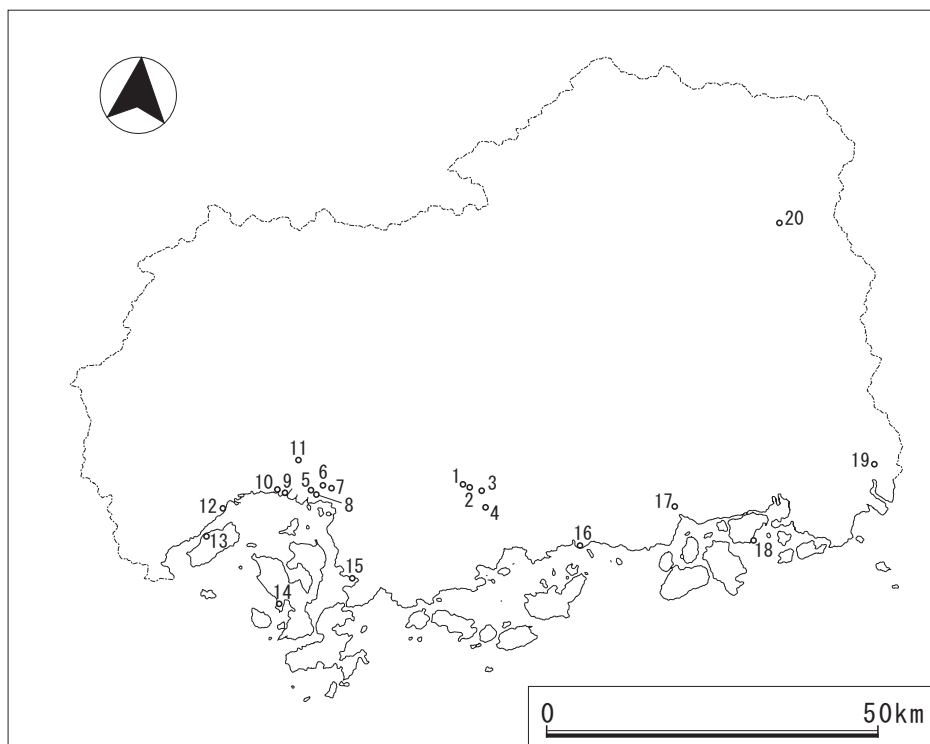


開発に伴う協議と立会・試掘調査の概要（2009年度）

1. はじめに

広島大学が所管する施設所在地は、本部キャンパスが位置する東広島市および統合移転する以前に本部キャンパスなどが所在した広島市を中心に広島県各地に分散しており、合計28ヶ所を数える（大学・附属学校校舎等を中心とする敷地7ヶ所、研究所等施設敷地8ヶ所、課外活動施設敷地5ヶ所、職員宿舍敷地8ヶ所）。これら大学関連施設において2009年度に掘削工事を伴う埋蔵文化財協議を実施したのは40件であり、そのうち12件について立会調査5件について試掘調査を実施した。本年度は、発掘調査に至る事例はなかった。協議件数40件を地区別に見ると、東広島地区（東



第44図 広島大学の校地所在地図（職員宿舍を除く）

1. 東広島地区 2. サイエンスパーク地区 3. 総合グラウンド地区 4. 下三永地区 5. 東千田地区 6. 霞地区 7. 東雲地区 8. 翠地区 9. 観音地区 10. 庚午南地区 11. 三滝地区 12. 廿日市地区 13. 宮島地区 14. 沖美地区 15. 呉地区 16. 竹原地区 17. 三原地区 18. 向島地区 19. 春日地区 20. 帝釈地区

第5表 2009年度(平成21)広島大学における開発に伴う埋蔵文化財協議一覧

件名		対象面積 (㎡)	協議書提出日	対応
東広島団地				
1	学生宿舎新営工事	1000.0	2009年4月	一部立会
2	記念樹植栽工事	5.0	2009年6月	工事
3	幼稚園砂場改修工事	14.0	2009年7月	立会
4	教育学部事務棟北側道路改修工事	5.0	2009年7月	工事
5	文学部事務棟東側通路改修工事	1.3	2009年7月	工事
6	学生プラザ新営工事	1300.0	2009年7月	工事
7	アカデミック地区北部サイン取設工事(5件)	8.5	2009年8月	工事
8	学生プラザ新営に伴う道路工事	750.0	2009年8月	工事
9	野球場南側道路カーブ・ミラー設置工事	0.5	2009年8月	工事
10	ものづくりセンター新営工事	975.0	2009年8月	工事
11	工学部機械専攻共用棟G4改修工事	100.0	2009年9月	工事
12	アカデミック地区西地区駐輪場上屋取設工事	600.0	2009年9月	工事
13	広島大学60周年記念事業に伴う看板取設工事	0.5	2009年10月	工事
14	工学部機械専攻共用棟G4改修に伴う電気配管工事	3.6	2009年11月	工事
15	アカデミック地区・学生宿舎駐輪場改修工事(17件)	1100.0	2009年12月	工事
16	理学部周辺外灯取設工事(2件)	150.0	2009年12月	工事
17	アカデミック地区外灯取設工事(9件)	760.0	2010年1月	一部試掘・立会
18	池の上学生宿舎外灯取設工事	162.0	2010年1月	工事
19	山中池南遺跡第2地点保存区整備工事	227.0	2010年1月	立会
20	大学院先端物質研究科駐輪場改修工事	69.0	2010年1月	工事
21	アカデミック中央・西部地区サイン取設工事ほか(4件)	188.0	2010年1月	工事
22	アカデミック地区駐輪場外灯取設工事(12件)	184.0	2010年1月	工事
23	教育学部北側駐輪場改修工事	1700.0	2010年1月	工事
24	ものづくりセンター西側ガス管敷設工事	16.0	2010年1月	工事
25	教育学部東端部舗装工事ほか	290.0	2010年2月	工事
26	南グランド屋外プール床改修工事	960.0	2010年2月	工事
霞団地				
1	解剖センター北側排気設備改修工事ほか	23.5	2009年4月	立会
2	共同溝布設工事ほか	4394.0	2009年5月	立会・試掘
	医学資料館東排水溝改修工事			立会
	植栽移設工事(医学部基礎棟南側)			立会・試掘
	排水溝布設(入院棟北側)			立会
	共同溝布設(バス停)			立会
	排水溝布設(バス停)			立会
	給排水管移設工事(医学部基礎棟南側)			立会

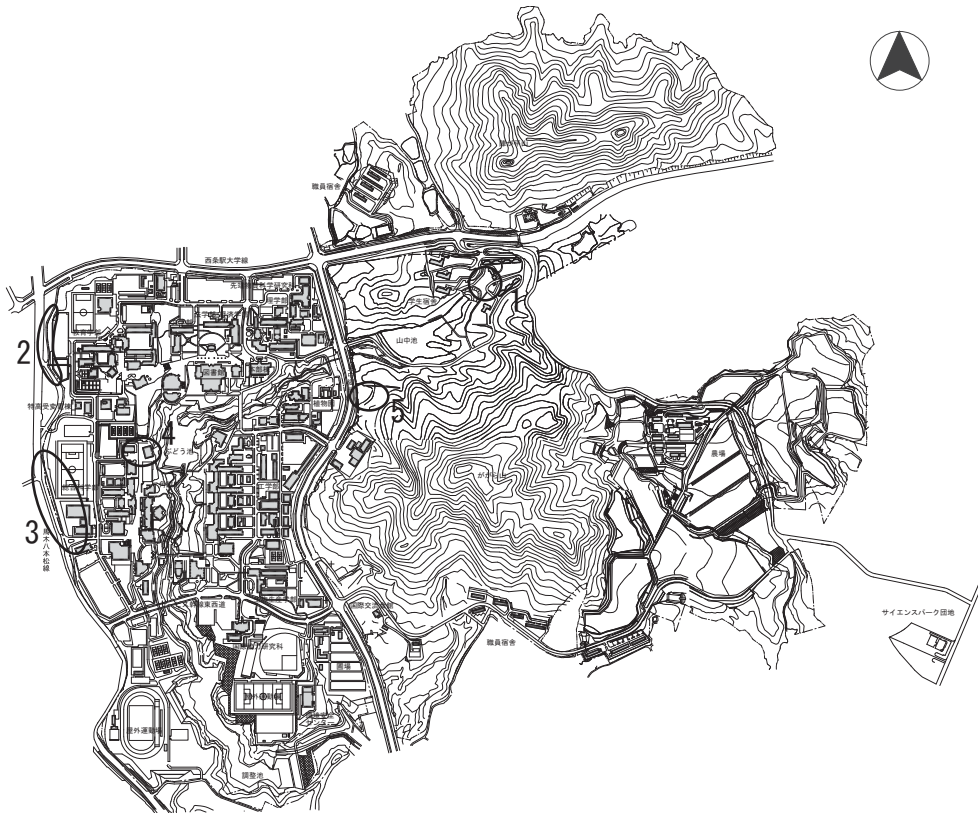
	共同溝布設（医学部基礎棟南側）			立会
	既存施設撤去工事（旧原医研敷地）			立会・ 試掘
	旧原医研テニスコート等掘削			試掘
3	職員宿舎解体工事	508.5	2006年6月	工事
4	大学病院外来診療棟新営工事	9665.0	2010年1月	試掘・立会
5	レジデンスハウス・ゲストハウス新営工事	744.0	2010年1月	立会
6	駐輪場改修・新営工事	288.0	2010年1月	一部立会
翠団地				
1	附属学校部事務棟（仮設）新営工事	195.0	2009年5月	立会
2	中・高校舎1号館改修工事	122.5	2009年6月	一部立会
東雲団地				
1	小学校給食室外部流し設置工事	4.5	2009年7月	工事
三原団地				
1	東側境界廻り排水改修工事	56.8	2009年6月	工事
2	小学校体育館雨水樹改修工事	7.0	2009年7月	工事
3	中学校特別教室周辺ガス管改修工事	94.0	2009年10月	工事
4	中学校プール南グランド排水溝改修工事	41.0	2010年1月	立会

広島市 27 件、霞地区（広島市）6 件、翠地区（広島市）2 件、東雲地区（広島市）1 件、三原地区（三原市）4 件である。本部が所在する東広島地区を主体としており、霞地区がそれに次ぐ件数であり、その他の地区で少数件の協議を行っている。例年の状況と基本的に変化はないが、霞地区の協議のうち共同溝布設工事ほかは 9 件の工事を 1 件にまとめて協議したもので、実質的には霞地区の協議は 14 件であり、例年に比べて増加している。立会調査の実績で見ると、東広島地区 4 件、霞地区 5 件、翠地区 2 件、三原地区 1 件で、東広島地区、霞地区を中心としている。しかし、地区別の協議動向で述べたように、霞地区の共同溝布設工事ほかは 9 件分の工事に相当し、すべて立会調査を実施した。立会調査実施のべ日数の実績で見ると、東広島地区 18.5 日（29 回）、霞地区 24.0 日（34 回）、翠地区 2.0 日（4 回）、三原地区 1.0 日（1 回）である。東広島地区の立会調査のうち 11.0 日は保存区整備工事であり、開発に伴う工事において、霞地区の調査日数の多さが際立っている。

試掘調査 4 件の内訳は、東広島地区 1 件、霞地区 3 件である。東広島地区の試掘調査は外灯新設に伴うもので、延べ 2 日の調査を実施した。霞地区の試掘調査は、共同

溝布設工事、外来診療棟新営工事に伴うもので、延べ18日の調査を実施した。とくに、共同溝布設工事に伴う既設施設撤去工事、外来診療棟新営工事については、2009年12月、2010年3月に延べ16.5日、総面積約2,000㎡の調査を行い、多くの遺構・遺物を検出した。

霞地区における立会・試掘調査については、調査日数、調査面積ともこれまでにない桁違いの実績となった。これは、霞地区全域が旧広島陸軍兵器補給廠⁽¹⁾跡地に当たっていること、2006年度から実施している立会・試掘調査によって地下の埋蔵文化財の様子がある程度明らかになり始めたこと、外来診療棟新営工事などの大型事業が行われたことなどが要因であろう。



第45図 2009年度東広島地区の立会調査位置図（縮尺1：20,000）

1. 池ノ上学生宿舎新営工事、2～4. アカデミック地区外灯取設工事（2. 北グランド西側地区、3. 西グランド西側地区、4. 鴻の巣南遺跡周辺地区）、5. 山中池南遺跡第2地点保存区整備工事

2. 試掘・立会調査の概要

次に、地区ごとに、試掘調査、立会調査の概要について述べてみたい。

東広島地区（東広島市）

1) 池の上学生宿舎新営工事

所在地 東広島市鏡山2丁目

調査期間 2009年10月15日・16日・19日

調査面積 1,000㎡

調査者 藤野次史

調査概要 広島大学池の上学生宿舎新営工事に伴い、電気配管・給排水管敷設部分について立会調査を行った。電気配管・給排水管敷設工事は新設宿舎から既設宿舎5号館・6号館・10号館へ配管を行うもので、配管敷設工事のうち、旧地形が残存している可能性のある東側部分について調査を行った（第46図A）。

調査では、遺構、遺物ともまったく検出されなかった。旧地形についても基本的に削平されていると判断された（写真2）。

2) アカデミック地区外灯取設工事

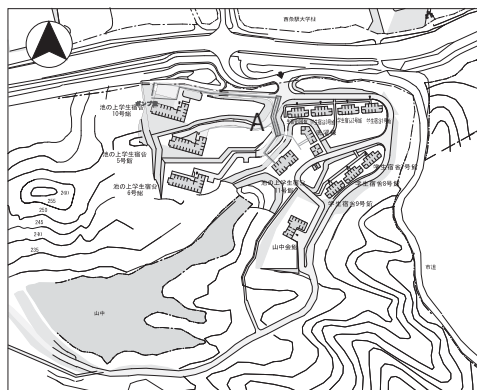
所在地 東広島市鏡山1丁目

調査期間 2010年1月22日・27日、
2月4日・22日

調査面積 約760㎡

調査者 藤野次史・永田千織

調査概要 アカデミック地区の外灯新設工事および既設外灯の取替え



第46図 学生宿舎申請工事に伴う配管工事位置図（縮尺1：4000）

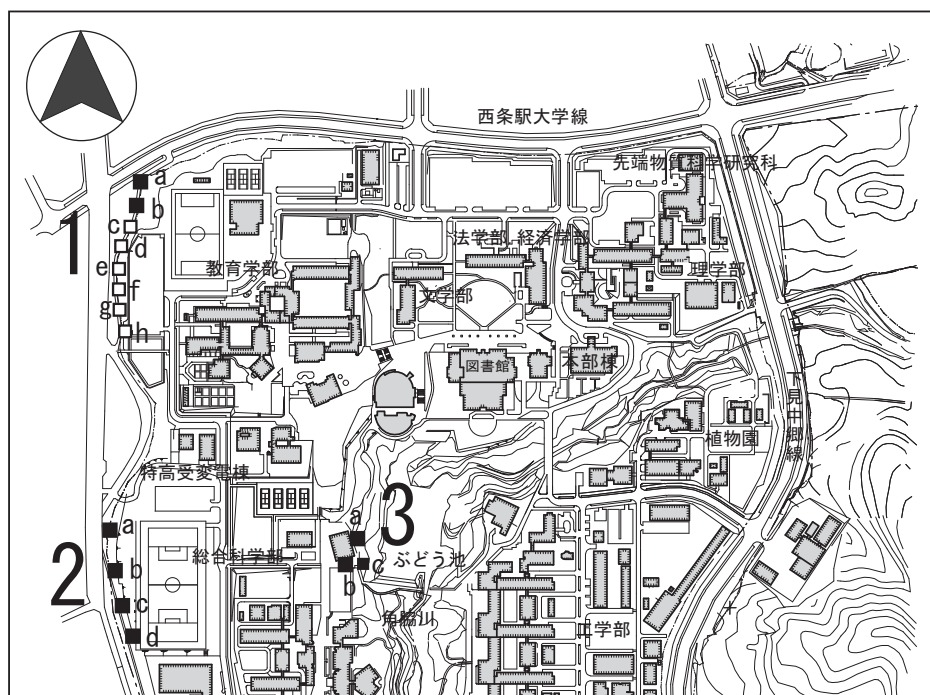
（図中のAの枠が調査位置を示す。）



写真1 調査区全景と掘削状況



写真2 電気配管掘り方掘削状況



第 47 図 外灯新設工事立会調査位置図

1. 北グランド西側地区、2. 西グランド西側地区、3. 鴻の巣遺跡周辺地区
 (四角は調査区を示し、■は試掘調査、□は立会調査を示す。)

工事9ヶ所のうち3ヶ所について立会・試掘調査を実施した(第45図2～4)。調査を実施した3ヶ所は、北グランド西側地区(第45図2)、西グランド西側周辺地区(第45図3)、鴻の巣南遺跡保存区周辺地区(第45図4)である。

北グランド西側(第47図1) アカデミック地区北東端部の北グランド西側敷地境界沿いに位置し、8基の外灯基礎部分と外灯間を繋ぐ電気配線配管掘り方部分について調査した(第47図1)。

協議段階では9ヶ所に外灯を設置する計画であったが、北端部の1ヶ所が中止となり、全体で8ヶ所の設置となった。外灯基礎部分のうち、北側のNo.1・No.2



写真3 北グランド西側地区 No.1 調査区完掘状況
 (南南西より)

調査区(1-a・b)は鴻の巣北遺跡保存区内に位置することからは試掘調査を行うこととし、残りのNo.3～No.8調査区(1-c～h)と電気配管部分は立会調査を行った。No.1調査区は南北約1.5m、東西約1mの規模で、深さ1.3mまで調査した。鴻の巣北遺跡では地表1m付近より下層に暗褐色粘質土が確認され、この層を中心に遺物が出土していることから、地表下約80cmまでバックボウで調査し、それ以下は人力で調査した。堆積土は上層より、橙褐色砂質土、橙褐色粘質土、橙褐色砂質土、黄褐色粘質土で、いずれの層も木炭の包含状態や色調や土質などから生活痕跡を推定させる状況ではなかった(写真3)。工事掘削予定深度は1.2mであり、遺構、遺物とも確認されなかったことから調査を終了した。No.2調査区は南北1.5m、東西1.5mの規模で、地表下約1.4mまで調査した。No.1調査区と同様に、地表下約70cmまでバックボウで調査し、それ以下は人力で調査した。堆積層の上半は橙褐色砂質土で、その下層に黄褐色粘質土(部分的)、黄褐色砂質土、暗褐色粘質土の順で堆積層が認められた(写真4)。遺構、遺物とも確認されず、工事掘削予定深度が1.2mであることから調査を終了した。



写真4 北グランド西側地区 No.2 調査区完掘状況(南西より)



写真5 北グランド西側地区 No.6 調査区完掘状況(西より)

No.3～No.8調査区については掘削工事に伴って立会調査を実施した。各調査区の掘削規模は平面約1m四角、深さ1.2m程度であるが、いずれの調査区も斜面西端に位置することから、斜面上部側(東側)上面から掘削下面までの深さは1.5～2.2m程

度となった。堆積層は、いずれの調査区とも斜面上部から1～1.5 mは橙褐色系粘質土または砂質土で、堆積層の半分以上を占めていた。遺構・遺物は確認されなかったが、No.6 調査区(1-f)では橙褐色砂質土直下(地表下1.3 m)で木炭を多量に含む黒褐色土(写真5)、No.8 調査区では最下層(地表下約1.7 m)で黒ボク層が確認された。No.5～No.7 調査区に隣接する地域は1994年度に試掘調査を実施し、弥生土器、石鏃が少量出土している(藤野1997)ことから、No.6 調査区周辺では近接して何らかの遺構・遺物が存在する可能性が高い。

電気配線配管掘り方の掘削規模は、幅40cm、深さ40cmで、全域で橙褐色砂質土～粘質土を主体とし、遺構、遺物ともに検出されなかった。

西グラウンド西側地区(第47図2)

アカデミック地区中央部西端部に位置する西グラウンド西側の県道馬木・八本松線沿いに位置し、旧地形が残存している北側4ヶ所の外灯基礎部分(No.1～No.4 調査区)と基礎を繋ぐ電気配線配管掘り方部分について調査した。

外灯基礎部分はいずれも試掘調査を実施した。No.3 調査区は地表下50cm程度、その他は70cm～1 mま



写真6 西グラウンド西側地区 No.1 調査区完掘状況(西南より)



写真7 西グラウンド西側地区 No.2 調査区完掘状況(西より)



写真8 西グラウンド西側地区 No.3・4 調査区全景(北より)

でバックボウで調査し、それ以下を人力で調査した。No.1・2調査区は平坦な丘陵の先端付近に位置している。No.1調査区（第47図2-a）は道路造成に伴って70cm近く削平され、西側が法面となっていた。南北約1.5m、東西約1mの規模で、深さ約1.7m（東側斜面上部からの深さ）まで調査した。上部約1mは黄褐色系の粘質土、砂質土で、その下層橙褐色粘土（厚さ5cm）、淡灰褐色粘土（厚さ25cm）が堆積し、最下層に西条湖成層と思われる褐色系～灰褐色系粘質土・砂質土等が堆積していた（写真6）。No.2調査区（第47図2-b）は南北約1.3m、東西約1.5mの規模で、深さ1.3mまで調査した。調査区の北側及び西側は地表下45cm付近からの大規模な掘削が行われており、土坑状の掘り込み断面が確認された。広島大学が移転する直前まで利用されていたぶどう園あるいは馬木・八本松線造成に関連するものと思われる。地表下90cm付近に黒色硬質土の薄い堆積が認められ、その直下に火山灰層と思われる黄褐色砂質土（始良Tn火山灰に類似する）が堆積していた。さらに下層にも火山灰あるいは火山灰風化土のような堆積土が認められ、最下層は灰色の粘土層である（写真7）。

No.3・4調査区は南東に延びる丘陵平坦部に位置する（写真8）。No.3調査区（第47図2-c）は南北約1m、東西約2mの規模で、約1mまで調査を行った。地表下60cmまでは褐色系粘質土が堆積し、その下層で花崗岩風化土、花崗岩地山（地表下約80cm以下）を確認した。No.4調査区（第47図2-d）は南北約1.2m、東西約1mの規模で、深さ約1.4mまで調査を行った。地表下70～80cmまでは道路建設に伴う盛土であり、調査区西半部は調査範囲はすべて擁壁基礎の掘り方埋土であった。調査区



写真9 鴻の巣南遺跡周辺地区 No.1 調査区調査状況（北より）

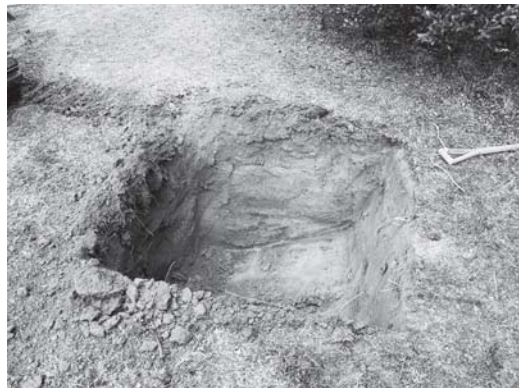


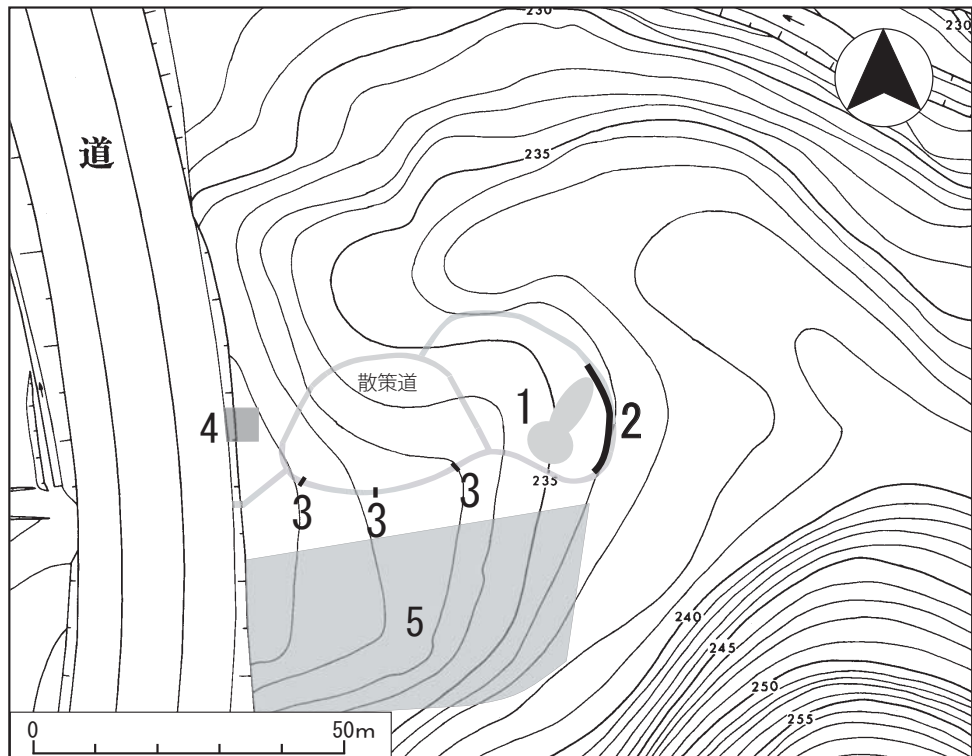
写真10 鴻の巣南遺跡周辺地区 No.2 調査区完掘状況（南より）

東半部は、地表下約1m付近に旧表土と思われる黒褐色土が堆積しており、その下層は暗褐色粘質土など（谷埋土に類似する）が堆積していた。いずれの調査区でも、遺構・遺物とも検出されなかった。

電気配線配管掘り方については立会調査を実施した。掘削規模は、幅40cm、深さ40cmであり、遺構・遺物とも検出されなかった。

鴻の巣南遺跡周辺地区（第47図3） 鴻の巣南遺跡保存区北側の西第1福利会館西側および保存区内に位置しており、No.1、No.2調査区（外灯基礎）、No.3調査区（ハンドホール基礎）および電気配線掘り方部分について立会調査を実施した。なお、外灯基礎部分、ハンドホール基礎部分はいずれも鴻の巣南遺跡の発掘調査終了部分に位置し、保存区外である。

No.1調査区（写真9）は南北約1.2m、東西約1.5mの規模で、深さ約1.5mまで調査した。旧地形は全て削平されており、すべて工事後の埋積土であった。No.2調査区



第48図 山中池南遺跡第2地点保存整備工事平面図

1. 1号須恵器焼成窯跡、2. 散策道手摺り、3. 排水用横断工、4. 工所用搬入路、5. 盛土用採土採集場所

は東西、南北とも約 1.3 m の規模で、深さ約 1.3 m まで調査した。深さ約 1 m までは調査後の埋積土で、その下層は褐色粘質土（厚さ 20cm 程度）、黄色砂質土（火山灰か）の堆積が認められた（写真 10）。No.3 調査区は、南北 1.3 m、東西 1.4 m の規模で、深さ 1.1 m まで調査した。地表下約 30cm までは発掘調査後の埋積土、その下層に黄褐色粘質土、黄色砂質土が堆積しており、地表下 80cm 付近から灰緑色粘（質）土に変化した。最下層は西条湖成層かもしれない。各調査区とも遺構・遺物は検出されなかった。

電気配線配管掘り方の掘削規模は、幅 40cm、深さ 40cm で、保存区外は工事後の埋積土内、保存区については遺構保護のための盛土内であり、遺構・遺物とも検出されなかった。

3) 山中池南遺跡第 2 地点保存区整備工事

所在地 東広島市鏡山 2 丁目

調査期間 2010 年 1 月 25 日～2 月 17 日

調査面積 227m²

調査者 藤野次史・永田千織

調査概要 広島大学東広島地区の山中池南遺跡第 2 地点保存区整備に伴って、散策道（階段手摺基礎部分ほか）および遺跡南西部の掘削部分について調査を行った。散策道は昨年度までの保存整備工事により全域が完成していたが、年度予算との関係から階段部分の手摺、散策道横断工の工事が本年度送りとなっていた。本年度復元予定遺構である古墳時代須恵器焼成窯跡東側については、傾斜が急な階段であること、復元遺構と接していることから当初より手摺を設置する計画であり、この度実施

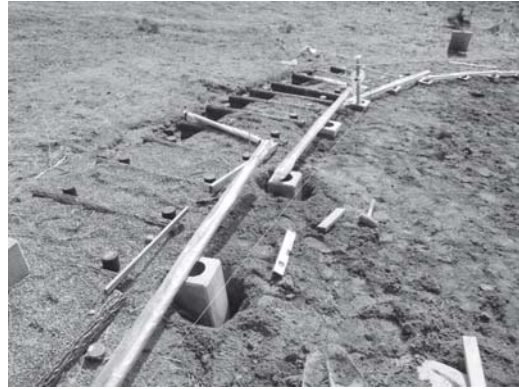


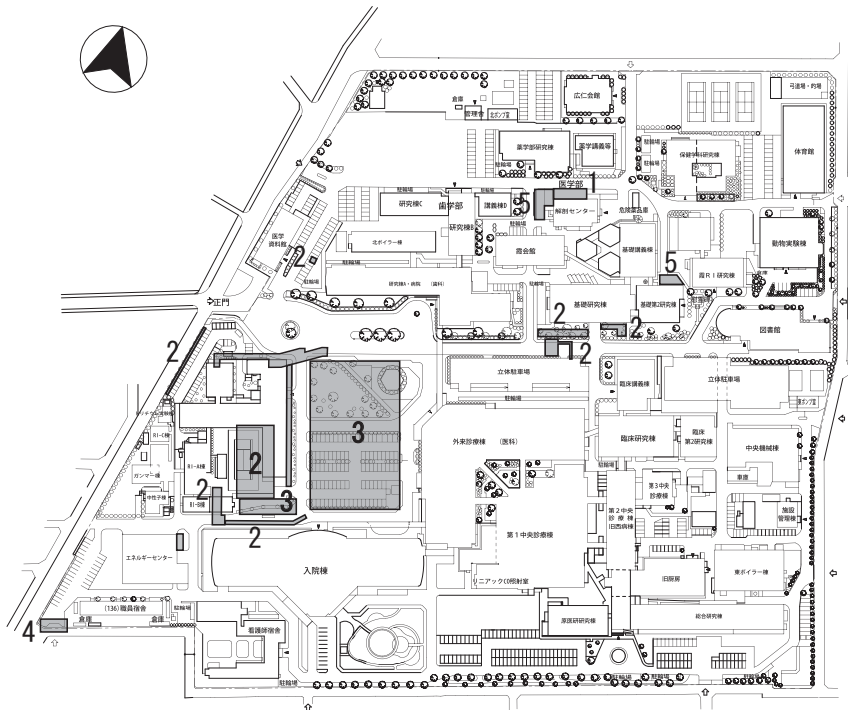
写真 11 山中池南遺跡第 2 地点保存区散策道手摺り設置状況



写真 12 山中池南遺跡第 2 地点保存区須恵器焼成窯跡焚口部復元状況

した。手摺は支柱基礎を約 1.2 m 間隔で、11 ヶ所に設置した。手摺基礎掘り方は、平面約 20cm 角、深さ約 50cm の規模で掘削した（写真 11）。階段最下部付近は上半部が遺構保存のための盛土で、約 20cm 程度新たな掘削を行った。階段中央部付近から次第に遺構保護盛土が薄くなり、階段最上段付近では厚さ 5 ～ 10cm 程度と薄く、新たに 40cm 程度の掘削を行った。掘削部分は発掘調査においていずれも遺構の確認されなかった箇所であるが、今回の調査においても、遺構、遺物とも確認されなかった。また、散策道のうち、南側の通路 3 ヶ所について横断工（雨水排水のため水路）を設置した。掘削規模は幅 30cm、深さ約 40cm である。遺構、遺物ともに検出されなかった。

遺跡南西部の掘削場所は 1996 ～ 1999 年度発掘調査区南西部にあたり、発掘調査後に排土を盛り上げた部分である。最大で 3 m 前後の盛土を行っていることから、今回の須恵器焼成窯跡の復元に必要な土砂をこの部分から調達した。遺跡中央部および遺跡南端部の盛土の堆積が薄い部分に特に注意しながら掘削を行ったが、いずれの場所



第 49 図 2009 年度震地区の立会・試掘調査位置図（1：5000）

- (1. 解剖センター排気設備改修工事ほか、2. 広島大学震地区共同溝布設工事ほか、3. 病院外来診療棟新営工事、4. レジデントハウス・ゲストハウス新営工事、5. 駐輪場改修・新営工事)

でも遺構面、旧地形面に達することはなかった。

この他、古墳時代須恵器焼成窯跡を復元するため、遺構上に改めて約 50cm の盛土を行った。焚口部付近については旧遺構保護用盛土の一部を含めて成形し、鉄筋枠にコンクリートを流し込んで成形を行ったが、遺構面以下の新たな掘削は全く行わなかった（写真 11）。また、工事資材搬入のため、歩道と保存区間の法面を掘削した。昨年度と同一場所（調査済）であり、新規の掘削は行わなかった。

霞地区（広島市）

1) 解剖センター排気設備改修工事ほか

所在地 広島市南区霞 1 丁目 2 番 3 号

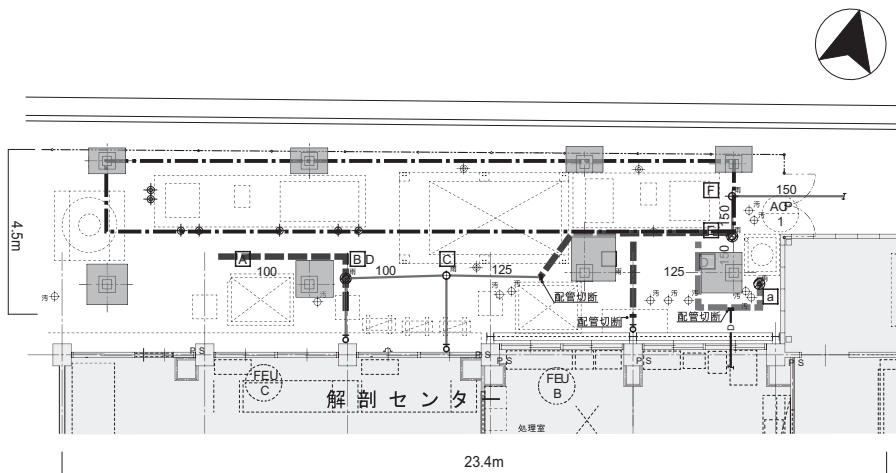
調査期日 2009 年 4 月 28 日・30 日、5 月 12 日

調査面積 23.5m²

調査者 藤野次史

調査概要 クロロホルム使用規定改正に基づく解剖センター排気設備の改修（ステージ設置）とそれに付随した雨水排水管改修（排水ルートの切替）工事に伴って立会調査を実施した。

調査対象地全域にはすでに解剖センター排気設備等の設備が設置されており、それらの設備の合間を縫うように、コンクリート床、ステージ基礎、雨水排水管を設置



第 50 図 解剖センター排気設備改修工事位置図（1：200）

（一点破線囲みはコンクリート床、濃い灰色四角はステージ基礎掘り方、破線は雨水排水管掘り方を示す。）

した。雨水配管掘り方掘削部分では、調査区東部および調査区西部において掘り方底面付近でコンクリート面を確認した。また、調査区北端部の排気設備のためのステージ基礎支柱掘り方の北側4ヶ所全てにおいてコンクリート面が露出し、調査区の北半部にコンクリート基礎（構築物）が広がっていることを確認した（写真13）。東西約17m、南北2mの規模と想定される。南東部基礎掘り方では厚さ約5cmのコンクリート壁が東西に40cm間隔で並んでいる状況で検出した（写真14）。浄化槽の跡と思われる。



写真13 北側ステージ基礎掘り方コンクリート基礎検出状況



写真14 南東部ステージ基礎掘り方建物基礎検出状況

これらの構築物の時期を示す遺物等は発見できず、広島大学移転後の施設配置図でも確認できなかったが、掘り方内の堆積物は解剖センターの建物根切（基礎掘り方）内埋積土、排気設備等の基礎掘り方埋土や昭和40年前後以降の盛土と判断された。また、掘り方底面や掘り方で検出した構築物についても、ステージ南東部基礎掘り方で検出された構築物が浄化槽と考えられることやコンクリートの構築状況などから、昭和40年以降の構築物と判断される。

2) 広島大学霞地区共同溝布設工事ほか

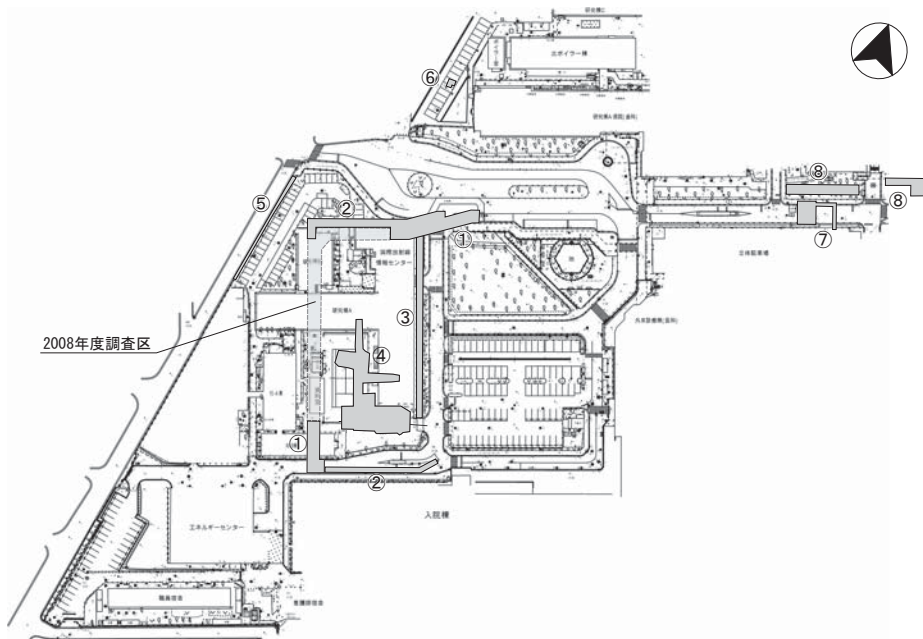
所在地 広島市南区霞1丁目2番3号

調査期日 2009年4月1日・10日・11日・23日、5月20日～28日、8月7日～25日、
12月10日～24日、2010年2月8日・9日

調査面積 4,394㎡（うち、562㎡を試掘調査）

調査者 藤野次史・永田千織

調査概要 広島大学霞地区共同溝布設工事に伴って調査を行った。工事は昨年度か



第 51 図 共同溝布設工事ほか調査区位置図 (1 : 3000)

(①共同溝布設工事地区、②排水溝布設工事地区、③既設共同溝解体・撤去工事地区、④共同溝新設に伴う施設撤去工事地区、⑤外壁撤去工事地区、⑥排水柵改修工事地区、⑦既設共同溝接続工事地区、⑧植栽移植工事)

らの継続工事である。旧原爆放射能医科学研究所敷地では、共同溝・排水溝の布設、旧共同溝などの既存施設の撤去に伴って試掘・立会調査を行った。また、排水溝布設に関連して医学資料館前の排水柵などを改修したため、これについても立会調査を実施した。医学部基礎棟南側では既設共同溝との接続工事とこれに付随する排水管移設、植栽移設に伴って試掘・立会調査を実施した。

共同溝布設工事地区 (第 51 図①)

旧原爆放射能医科学研究所 (以下、旧原医研と略す) 敷地に位置し、昨年度からの継続工事である。昨年度は原医研 R I - A 棟・同 R I - B 棟東側隣接地に南北共同溝を設置し、今年度は南北共同溝南端部 (以下、南北調査区) と北側の東西共同溝 (以



写真 15 南北共同溝布設工事掘削状況

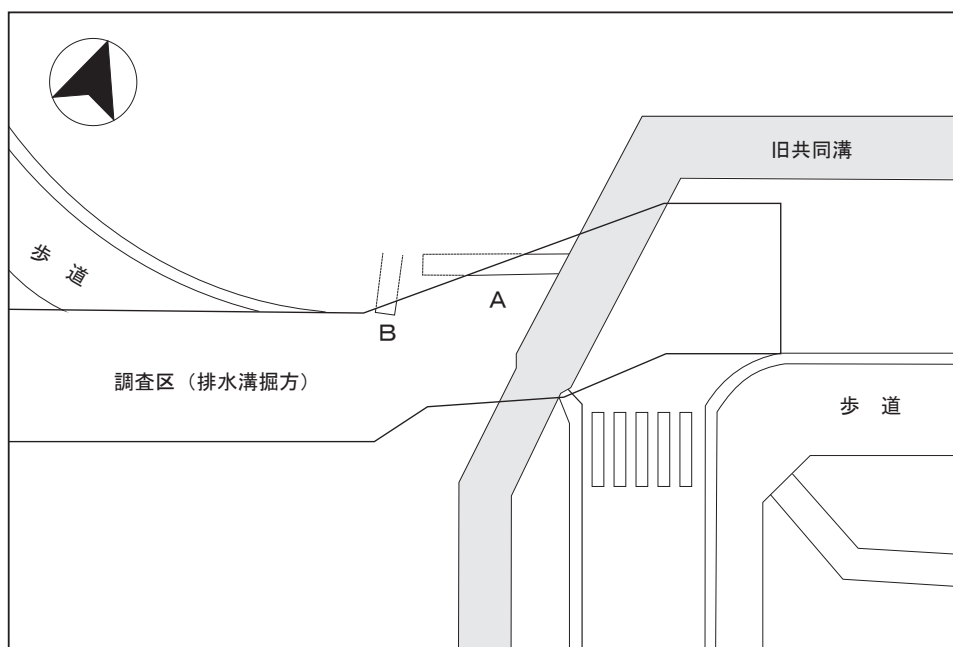


写真16 共同溝布設地区南北調査区南端部
堆積状況（3次掘削）



写真17 共同溝布設地区東西調査区出土コ
ンクリート基礎
（上：全体、下：側面、いずれも写真下側が上面）

下、東西調査区)を設置した。これに伴い、地表下約8mまで掘削を行った。調査区全域で、地表下3m付近から近世陶磁器片が少量出土した。南北調査区は調査区北半部は旧陸軍兵器補給廠(以下、兵器補給廠と略す)造成土が残されていたが、南半部は道路、下水管等の既存施設があり、多くが削平されていた。兵器補給廠造成前の水田層以下はほぼ全域で観察された。東西調査区については、西半部が昨年度末からの継続工事で、大半の掘削を終えていた。今年度は南北共同溝と東西共同溝が接する北西隅と東半部(バス停付近)を中心に立会調査を実施した。調査区東半部で、後述する建物基礎と同様のコンクリート基礎1基出土した(写真17)。出土地点は調査区中央部南端で、原位置で出土した可能性が高いが、工事中的出土であり、出土状況を確認できなかった。基礎の約半分が欠失した状態で、現存長約2.5m、幅80cm、コンクリートの厚さ約30cmである。コンクリート下面には大型栗石が接着したままの状態である(写真17下)。側面には木製型枠跡が明瞭に残され、上面には建物基礎横木と思われる痕跡が認められた。旧広島陸軍兵器補給廠関連の建物基礎遺構と思われる。この他、兵器補給廠造成前の水田層内で時期不明の木組み遺構、水田層下層のシルト層、砂層でカキを主体とする貝層が確認された。



第 52 図 排水溝布設工事北地区検出遺構の位置図 (1 : 300)
 (Aは東西建物基礎、Bは南北建物基礎である。)



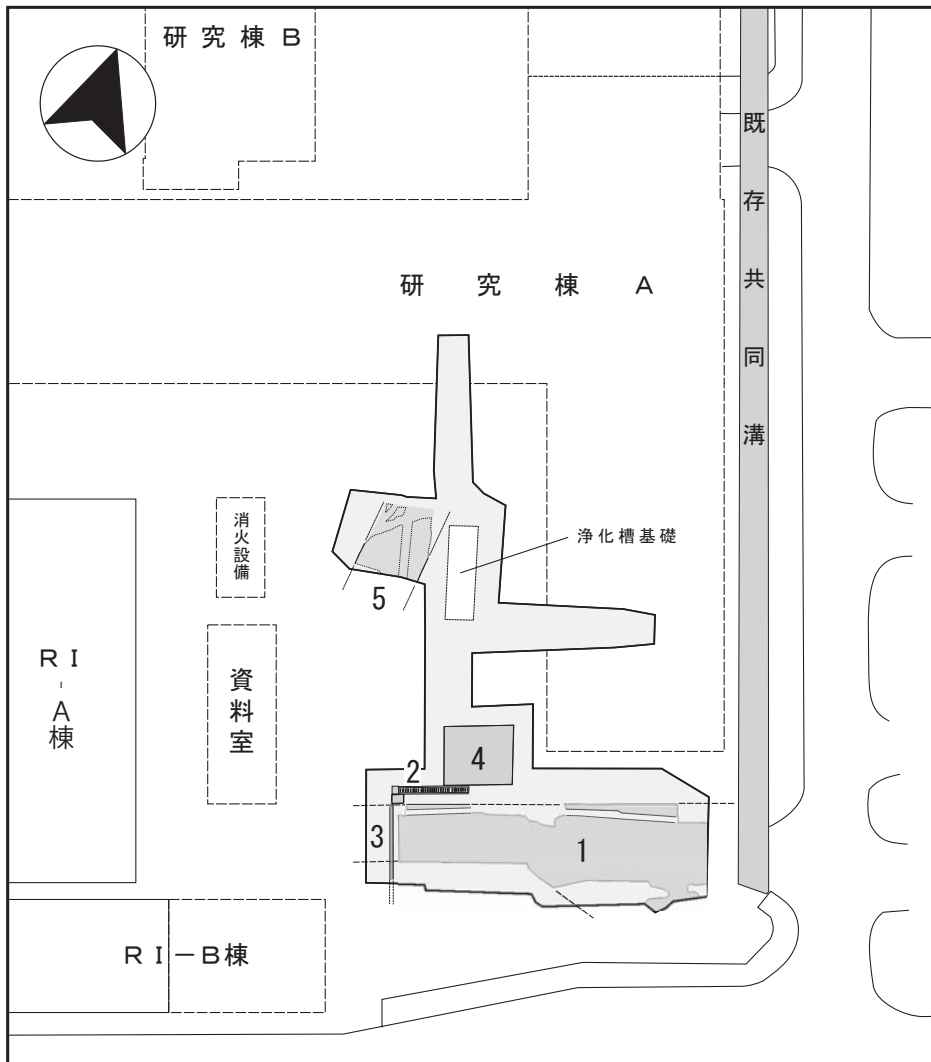
写真 18 排水溝布設工事北地区建物基礎
 検出状況



写真 19 排水溝布設工事北地区南北
 建物基礎南端部検出状況

排水溝布設工事地区 (第 51 図②) 旧原医研敷地北端部 (以下、北地区) および南端部 (以下、南地区) の雨水及び汚水排水溝布設に伴い立会調査を実施した。北地区は、東西共同溝北側隣接地に位置し、東西共同溝に平行してバス停西端部まで延びている。地表下 3 ~ 4 m まで掘削を行った。調査区西端部北縁部 (歩道付近) でコンクリート建物基礎 2 基を検出した (第 52 図 A・B、写真 18)。検出面は地表下約 50cm

である。東側の基礎は東西方向（第 52 図 A。以下、東西建物基礎。）、西側の基礎は南北方向に主軸がある（第 53 図 B。以下、南北建物基礎。）。両者は直交していないことから別の建物基礎と考えられる。コンクリート基礎は厚さ約 30cm、幅約 90cm の規模で、東西建物基礎は長さ約 3.6 m 分を確認した（写真 17 右）。西側基礎は調査区内に露出しているのは南端部のみで、長さは不明である（写真 18）。コンクリート内に長さ 5cm 前後の円礫を多数含んでいる。コンクリート基礎の下底には厚さ 5cm



第 53 図 既存施設撤去工事地区の調査区と検出遺構（1：1000）
 (1. 東西道路遺構、2. 道路側溝、3. 給水施設、4. 貯水施設遺構、5. 南北道路遺構)

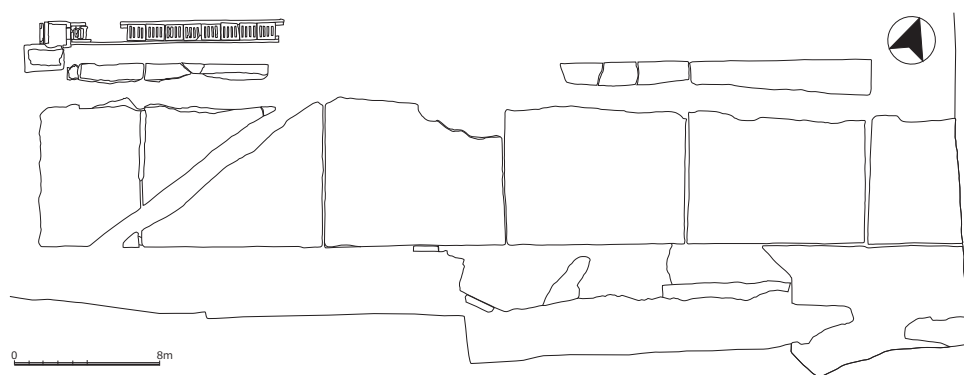
程度の円礫栗石層があり、その下層に長さ 25cm 前後の割栗石を立てて基礎としている。東西建物基礎上面では建物基礎横木と思われる木の痕跡がわずかに観察された。

南地区は入院棟歩道沿いの場所で、歩道北側の通路（学内連絡道）下である。地表下 2 m 程度まで掘削を行ったが、全て入院棟建設時の埋設土であった。

既設共同溝撤去工事地区（第 51 図③） 新たな共同溝布設に伴い、旧原医研西端部の既設共同溝を撤去した。掘削は既設共同溝設置の掘り方内に収まっていた。

既設施設撤去工事地区（第 51 図④） 旧原医研研究棟撤去の際に、同研究所中庭テニスコート隣接部で瓦敷面などの遺構面が確認したことから、既設施設撤去に先立ち中庭テニスコートおよび隣接の試掘調査を実施した。調査の結果、道路遺構 2、道路側溝 1、給水施設 1、用水施設遺構 1 などを検出した（第 53 図）。

道路遺構は調査区南部で東西道路（第 53 図 1）を、調査区北部で南北道路（第 53 図 5）を検出した。東西道路は主軸が西南西－東北東で、約 25 m 分を確認した（第 54 図、写真 20）。平面は 5 m × 5 m を 1 単位としており、型枠にコンクリートを流し込み、路面を造成している。調査区西半部では 1 単位を東西に連結する形で路面を形成している。また、路面西端部から 10.5 m 付近より東側の調査区東半部は南側に路面が拡張されている。大半は北端部が残存しているのみであり、規模は不明である。調査区南東部では南北 3.6 m 分を検出しており、さらに 1 単位分の路面が存在した可能性が高い。しかし、南側に路面が始まる西端縁辺部は主軸に対して斜交しており、縁辺部には角柱状の縁石を並べていること、南側隣接地で大学病院外来診療棟新営工事地区の調査で煉瓦建物（解体撤去した旧医学部 11 号館で、兵器補給廠建物である。後述。）を検出したことなどから、煉瓦建物入口（正面玄関など）に通じる通路部で、東西道



第 54 図 道路遺構・側溝平面実測図（1：400）

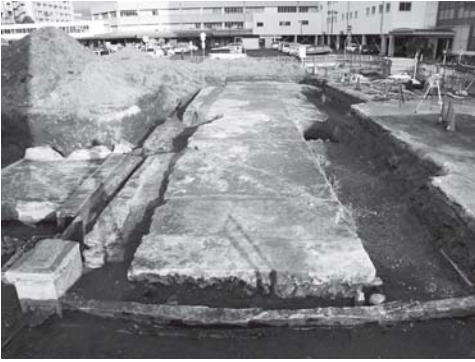


写真 20 既存施設撤去工事地区東西道路遺構・側溝・排水施設全景



写真 21 既存施設撤去工事地区道路遺構断面



写真 22 既存施設撤去工事地区側溝



写真 23 既存施設撤去工事地区排水柵



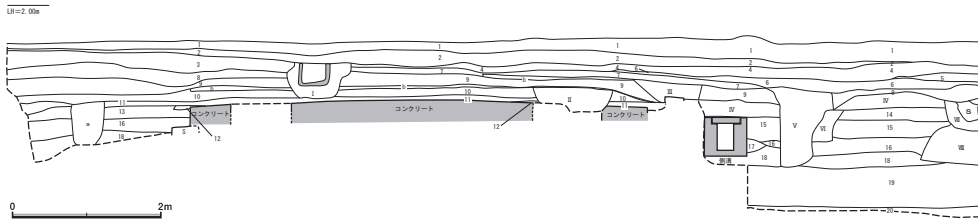
写真 24 側溝完掘状況



写真 25 既存施設撤去工事地区貯水施設



写真 26 既存施設撤去工事地区南北道路遺構



第55図 南北調査区南部西壁セクション図 (1:80)

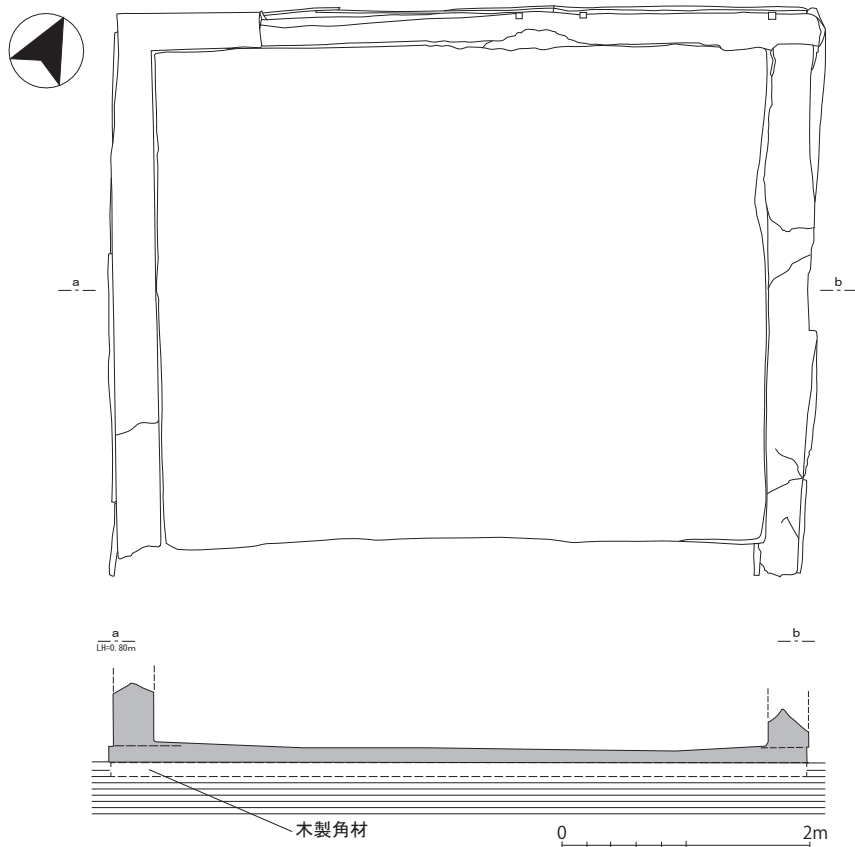
(1. 現表土 (整地面)、2. 整地面、3. 整地面、4. 暗褐色砂質土 (砂利などを含む)、5. 明褐色砂質土、6. 灰褐色砂質土と明褐色砂質土の互層、7. 暗灰褐色砂質土。レンガ片などを含む、8. 暗褐色砂質土 (礫・レンガ片を含む)、9. 暗褐色砂質土 (砂利を含む)、10. 暗褐色砂質土 (砂利を含む)、11. 暗褐色砂質土 (小型の礫を含む)、12. 暗灰褐色砂質土、13. 黒色～暗褐色砂質土と砂利の互層、14. 暗橙褐色砂質土、15. 暗灰褐色土と暗橙褐色砂質土の互層、16. 明褐色砂質土、17. 暗灰褐色砂質土、18. 暗褐色砂質土、19. 暗赤褐色砂質土 (大型の角礫を含む)、20. 青灰色粘質土、a. 暗灰褐色粘質土、b. アスファルト面、I～VII. 現代の造成による掘り込み)

路全体が幅2単位の路面ではなかった可能性が高い。

道路の造成の概要は、まず兵器補給廠造成土上に長さ30～80cm、厚さ20～40cm程度の扁平な角礫を乱雑に敷いている (第62図、写真21)。さらに、大型角礫層の上部に長さ10cm前後の大型の円礫を10～15cm程度の層状に敷き、最後に円礫混じりのコンクリートを流し込んで路面を完成している。路面はほぼ水平であるが、北端から約1m南付近が最も高く、南北へ緩やかに傾斜している。

東西道路北側には道路に平行してコンクリート側溝 (第53図2) が設置されており、東西約6.5m分が残存していた (第54図、写真22)。西端部は排水柵で、平面70cm四角、深さ約60cmの規模である (写真23)。側溝はコンクリート蓋で覆われ、側溝の外側幅約60cm、内法は幅30cm、深さ30cmで、蓋は45cm×50cm (長辺が溝主軸方向) の規模である。この他、側溝柵の南側に接して給水設備を検出した (第53図3)。側溝西端部の集水柵の南側に隣接して、コンクリート給水柵 (写真23) が設置されており、柵南面下底部西端から東西道路を横断するように南南西西に向かって直線的にコンクリートに覆われた給水管が敷設されていた (写真20下端部)。

東西道路北側の側溝に隣接してコンクリート製の構築物を検出した (第56図、写真25)。平面長方形で、東西5.8m、南北4.6mの規模である。壁面の大半は削平されており、もっとも残存状況の良い箇所でも高さ50cm程度であった。壁の厚さは約40cmで、外側には型枠を固定した5cm角の角材が残存していた。コンクリート床面は旧陸軍広島兵器補給廠造成土基底面の直下付近にあり、兵器補給廠設置以前の水田面上に約20cm四角の角材を敷いて基礎とし、その上に厚さ13cmのコンクリート床を構築している。コンクリート床上に壁を築いており、壁構築後に内面にコンクリー



第 56 図 貯水施設遺構実測図 (1 : 60)

ト面の上塗りをして仕上げています。床面はコンクリート道路面より約 1 m 低いことから、少なくとも構築物の外側は道路面まで埋積されていたものと想定される。内面の仕上げの状況から建物基礎の可能性は低く⁽¹⁾、貯水用の施設の可能性が高い⁽²⁾。防火用水施設であったと想定される。

南北道路 (第 53 図 5) は主軸がやや東に傾いているがほぼ南北方向で、わずかに 6 m 分を検出したに過ぎない (写真 26)。南側に残存部分が存在すると思われるが、調査は実施できなかった。かなり削平が進んでいるが、幅約 6 m の規模と思われる。道路の構造は、造成土の上に瓦片などを 10cm 程度の厚さに敷き、その上に厚さ 10cm 程度のコンクリートを敷いて路面としており、東西道路に比べてかなり簡易な構造である。道路面上は炭混りの黒褐色土が堆積しており、磁器片などが出土した。

外壁撤去地区 (第 51 図⑤) 外壁の撤去に伴い、立会調査を行った。撤去地区の北

側で舗装面を約 10 m 分確認した（写真 27）。砂利を厚さ 10cm 程度に敷き詰め、その上面を硬化させている（硬化剤は不明）。北端部に基礎状のコンクリートの塊が認められた。また、北端部から約 8 m の位置で舗装面下にコンクリート構築物を検出した。北側は削平され、東側は調査区外であるため全体の形状は不明であるが、平面方形と推定され、現状で、東西 81cm、南北 107cm である。壁は厚さ 15cm で、内面は平滑に仕上げられている。

既設排水柵改修地区（第 51 図⑥）

排水溝新設工事に付随して新設排水溝の北側に位置する既設排水柵の改修工事を行った。これに伴って立会調査を実施したが、遺構・遺物ともに検出されなかった。

既設共同溝接続工事（第 51 図⑦）

医学部基礎研究棟の西側に位置する既設南北共同溝と新設の東西共同溝の接続工事に伴って立会調査を行った。場所は、医学部基礎研究棟南側隣接部で、既設給水管を西側に移設し、移設後、共同溝接続部分の掘削を行った。既設給水管移設部分では地表下約 1 m まで、共同溝接続部分では地表下約 6 m まで掘削を行ったが、遺構はまったく検出されなかった。遺物については、古墳時代須恵



写真 27 外壁撤去工事地区舗装面検出状況

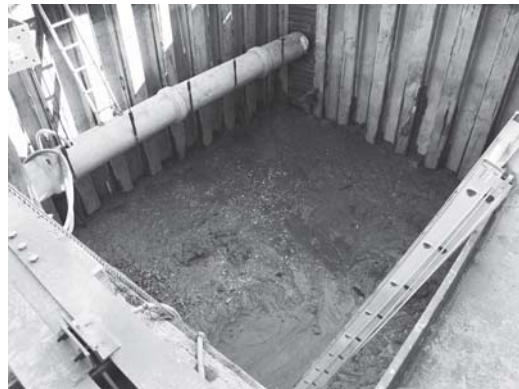


写真 28 既設共同溝接続工事地区掘削状況
（混貝土層露出状況）



写真 29 植栽移設工事地区掘削状況

器破片が1点採取されたが、上流からの流れ込みと思われた。

植栽移設工事（第51図⑧） 医学部研究基礎棟南側の共同溝接続工事に伴って工事地区の北側に迂回路を設置するため、植栽を医学部基礎第2研究棟南側に移設した。これに伴い、移設先については試掘調査、移設元については立会調査を実施したが、遺構・遺物ともに検出されなかった。

小 結 調査で検出された遺構は、建物基礎、道路遺構、側溝、給水施設遺構、貯水施設遺構などである。排水路工事地区検出のコンクリート基礎はコンクリート上面に木製構築物が存在したことを推定させる痕跡が残されており、木造建物の布基礎と推定される。基礎の構造や基礎上面の検出レベルなどから第2次世界大戦以前の構築物と考えられ、旧広島陸軍兵器補給廠（以下、兵器補給廠と略す）関連の遺構と考えられる。基礎の方向から少なくとも2棟の建物存在が推定される。既存施設撤去工事地区で検出した南北道路付近では断面で複数枚の遺構面を確認することができたが、平面的な広がりを確認するには至らなかった。コンクリート道路面は最上部の遺構面で、道路上の堆積物からは第2次世界大戦終戦直前と思われる遺物が出土した。東西道路では路面上などで磁器微小破片がわずかに出土したのみで、明確に時期比定できる遺物を欠いているが、南北道路と同時に存在した遺構と考えられ、いずれも兵器補給廠関連の遺構であろう。隣接する貯水遺構も同様に兵器補給廠関連遺構と想定され、防火用水施設と想定される。東西道路に沿って設置されている側溝、および横断して設置されている給水施設は兵器補給廠関連遺構の可能性とともに戦後に設置された可能性もあり、さらに検討が必要である。外壁撤去地区の舗装面は西側隣接地が旧宇品線上大河駅であることから、駅に関連した遺構である可能性がある。

3) 病院外来診療棟新営工事

所在地 広島市南区霞1丁目2番3号

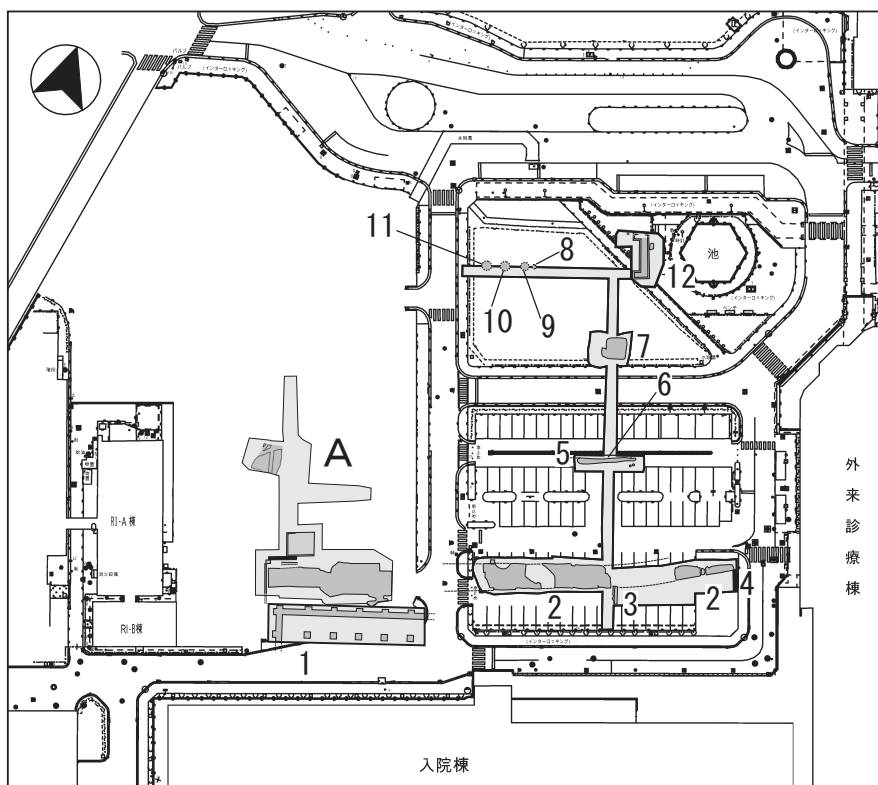
調査期日 2010年2月23日・25日、3月1日～11日・18日

調査面積 9,665㎡（うち、786㎡を試掘調査）

調査者 藤野次史・永田千織

調査概要 広島大学病院外来診療棟新営工事に伴って調査を行った。工事は次年度以降も継続予定で、本年度は予定地内の植栽（高木）の移設・撤去、地中埋積物の撤去が行われる予定であるため、それに先立って工事予定地の東半部（旧駐車場および緑地）を中心に試掘調査を行った。

調査地区は、北半部が緑地、南半部が駐車場として利用されており、広島大学が当



第 57 図 外来診療棟新営工事地区の調査区と検出遺構 (1 : 2500)

(1. 煉瓦建物基礎、2. 道路遺構、3. 建物進入路遺構、4. 側溝、5. 暗渠状遺構、6. 溝状遺構、7. 大型土坑、8～11. 土坑、12. 貯水施設遺構；Aは既存施設撤去工事地区と検出遺構)

地に移転して以降、長らく運動場として利用され、その後も建物などの構築物は設置されなかった。調査地区の南端部及びその西側（旧原爆放射線医学研究所敷地南端部、旧原爆放射線医学研究所については以下原医研と略す）には医学部旧 11 号館（旧陸軍兵器補給廠建物）が位置していた。旧原医研敷地部分については原医研南部の研究棟建設に伴って取り壊し、その東側部分についても入院棟建設（2002 年完成）に伴って基礎を含めて撤去された。

調査は、まず、工事予定地東半部（旧駐車場、緑地）のほぼ中央に幅約 2 m の南北トレンチを設定した。調査区南端部では旧 11 号館基礎掘り取り痕跡が明瞭に残されていたが、その北側隣接部分でコンクリート製道路遺構（第 57 図 2）を確認するとともに、調査区中央部でコンクリート片、瓦が充填された掘り込み（第 57 図 5）、調査区北部で木炭が充填された掘り込み（第 57 図 7）を調査区断面で確認した。道路遺構路面は東西に広がっていると推定され、既存施設撤去工事に伴う試掘調査（上述）

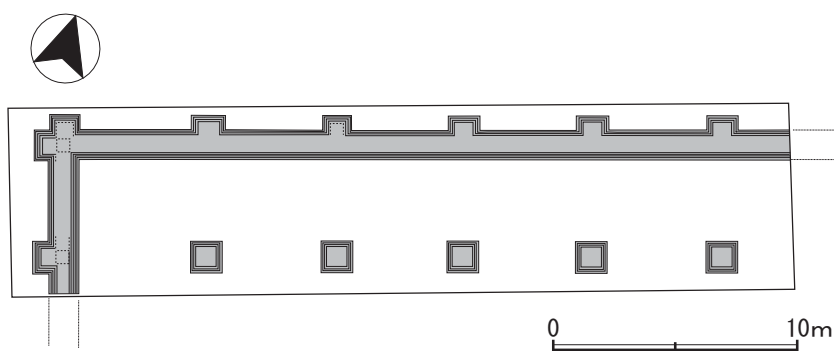
で検出した道路遺構（旧原医研敷地南部）に連続する遺構と判断されたことから、調査区東半部全体に東西調査区を設定して調査を行った。また、調査区中央部および調査区北部で検出した掘り込みは調査区の東西断面で確認されることから、調査区の東西に広がりを見せていると判断され、これについても東西に10 m程度の拡張を行って調査を実施した。また、工事予定地北東端部に設置されていた池を撤去する際に水路状のコンクリート構築物（第57図12）が確認された。水路状のコンクリート構築物は南北方向に直線的に延びていることから、南北方向の調査区を設定して調査を行った。さらに、調査の結果、調査区南部では調査区の西側を中心に構築物が確認されたことから、調査区北部について遺構の有無を確認するため東西の調査区を設定して調査を行った。

調査期間中に、旧原医研地区において試掘調査で確認した旧広島陸軍兵器補給廠（以下、兵器補給廠）関連遺構の撤去作業が行われ、外来診療棟新営工事に伴う試掘調査と並行して立会調査を実施した。旧原医研地区は試掘調査によって検出した遺構の構造について撤去の際に補足調査した。また、調査範囲の周囲に遺構の広がりが予想されたものの、期間等の関係から全域での遺構確認が実施できなかったため、新たに検出した遺構についても可能な範囲で調査を行った。その結果、先の試掘調査で検出した道路遺構南側隣接地で旧11号館西半部と考えられる煉瓦建物基礎（第57図1）を検出した。遺構を検出した一帯は、試掘調査時に通路として利用されていたことや旧11号館はすべて基礎部分まで撤去を行ったとの担当者の解答であったことから試掘調査を実施しなかった場所である。清掃を行い、写真撮影等の簡易記録を作成した。

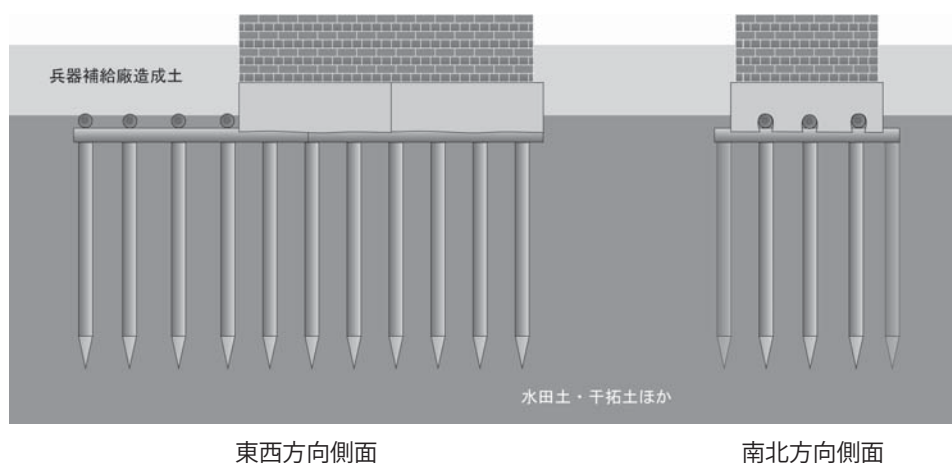
試掘調査の結果、工事予定地東半部で、コンクリート道路1、側溝1、貯水施設遺構1、コンクリート片・瓦片充填溝1、溝1、木炭充填土坑1、土坑4などを検出し、工事予定地西半部で新たに煉瓦建物基礎1を検出した。

以下、検出遺構の概要について説明する。

煉瓦建物基礎（医学部旧11号館） 旧原医研敷地南端部において煉瓦等で構築した建物基礎を検出した。兵器補給廠建物は、第2次世界大戦終了後、しばらくは広島県庁などに利用され、1957年2月以降は広島大学医学部、同大学病院などの施設となった。しかし、1970年前後から新規建物建設により順次取り壊され、1999年に入院棟建設に伴って最後まで残されていた医学部旧11号館が解体・撤去された。この際、建物基礎も含めて全て撤去された。しかし、この建物はもともと旧原医研敷地南端部まで存在したものを1967年頃に旧原医研研究棟増築に伴い、西側半分（旧原医研側）



第 58 図 外来診療棟新営工事地区検出煉瓦建物遺構平面図（1：300）
 (1. 外壁・側柱煉瓦基礎、2.建物内部通柱基礎、3. 柱最下段)



第 59 図 外来診療棟新営工事地区検出煉瓦建物基礎構造模式図

を解体して東側半分を残し、利用してきたものであった。西側半分を解体・撤去した際に地下部分についてはそのまま埋め戻したものと思われ、今回検出した遺構は旧医学部 11 号館北西隅を含む北西部にあたる。

調査では東西約 30 m、南北約 8 m 分の建物基礎を原位置で確認した（第 58 図、写真 30・31）。基礎基底面は兵器補給廠設置以前の水田面付近にある。基礎は建物全体に構築されているわけではなく、側柱、外壁の位置全体と建物内部の通し柱部分のみである。すなわち、建物周囲の基礎は連続して平面口の字状であるが、建物内部は通し柱部分基礎は島状に独立して構築されている。基礎は側柱・外壁部分と建物内部の通り柱部分では平面規模の相違だけで、基本構造は同じである。構造の概要をみると、



写真 30 外来診療棟新営工事地区検出煉瓦建物基礎検出状況



写真 31 煉瓦建物基礎北東隅および西辺部



写真 32 煉瓦建物基礎煉瓦構築状況
(上：北辺部外側、下：西辺部内側)



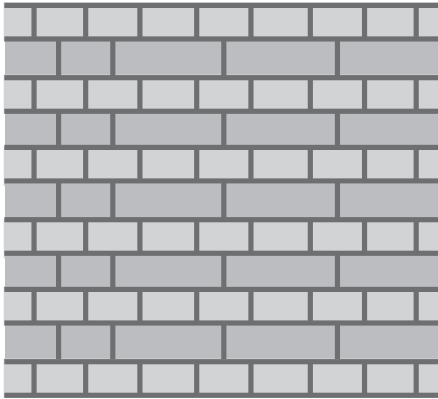
写真 33 煉瓦建物基礎西辺部柱周辺の基礎
上面状況



写真 34 煉瓦建物基礎断面



写真 35 煉瓦建物コンクリート基礎下底面



第 60 図 煉瓦イギリス積み模式図

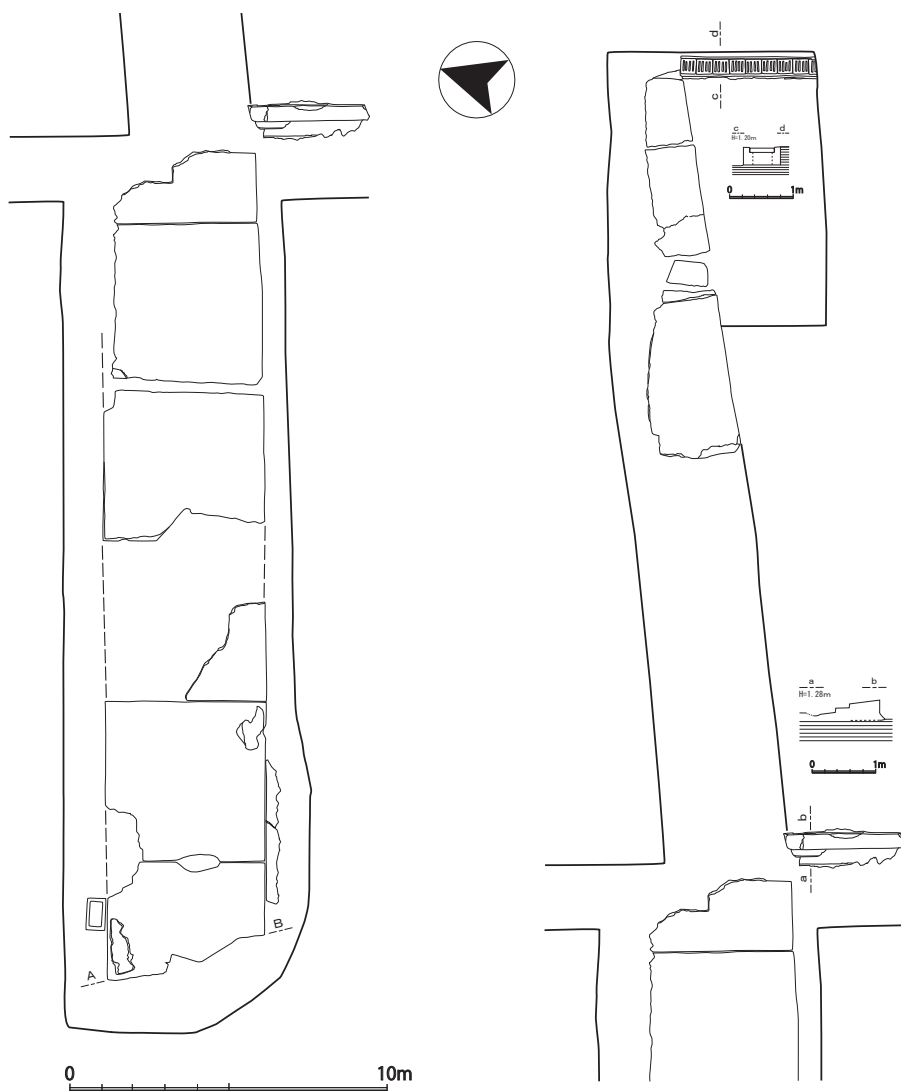


写真 36 煉瓦建物基礎支柱抜き状況



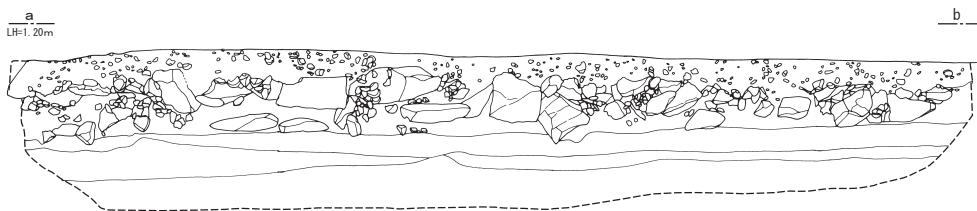
写真 37 煉瓦建物基礎杭抜き集積状況

まず松杭をほぼ等間隔に打ち込んでその上に同じく松材で井桁状に基礎を組み、3～5cm 程度の大型円礫を主体に厚く敷き詰めてその上に厚さ約 50～60cm のコンクリート基礎を構築している（第 59 図）。コンクリート基礎内には 3～5cm 前後の大型円礫を多量に含んでいた。基礎杭の規模は平均で長さ約 220～240 m、直径約 14～18cm で、間隔は約 1 m と推測されるが、垂直に打ち込まれたマツ製基礎杭の間隔や配列は工事中の立会い調査のため正確に測定することはできなかった。上記の状況であるため、実際に基盤の目状に規則正しく設置されていたかどうかは確証はない。しかし、1965 年前後までは沖積地などの軟弱地盤では、木製杭を打ち込んでその上に建物基礎を構築する工法が取られていたようであり、1964・65 年に竣工した旧原医研研究棟 A の解体の際に等間隔に並んだ基礎杭を確認したことや、マツ製基礎杭は本建物遺構下で集中的に位置していた（工事中確認）ことなどから等間隔に配列されていたと想定した。基礎杭上に構築された井桁状の木製基礎は、基礎杭同様の直径約 14～18cm のマツ材を利用しており、両端をまっすぐ切り落としている。まず側柱列と直行方向に丸木を約 0.5 m 間隔で置き、その上に側柱方向に約 0.5 m 間隔に丸木 3 本を平行に配置している（写真 35）。基礎杭の一部はコンクリート製基礎に直接



第 61 図 道路遺構平面実測図 (1 : 250)

(左図の延長上に右図が位置し、左図の上半部と右図の下半部は重複して表示している。)



第 62 図 道路遺構断面立面図実測図 (1 : 40)

(第61図A - Bの立面図である)

接続しているものがあり、基礎杭は必ずしも一直線に配置されていなかったか、井桁状の木組みの配列の間にも存在したか、いずれかであろう。なお、基礎杭、井桁状の木製基礎は相互に鉄製楔で固定されていた。これら最下段の木製基礎上段はコンクリート基礎におおむね取り込まれる形で、コンクリート基礎下面に明瞭に痕跡を認めることができた。しかし、下半は痕跡がわずかに残される程度であり、下段はなかば土に埋まった状態であったものと推定される。

さらに、コンクリート基礎の上に煉瓦基礎を4段積み重ねて建物基礎としている(写真32)。煉瓦基礎の高さは約55cmで、煉瓦基礎の各段は上下2段に煉瓦を重ねている。側柱列・外壁基礎についてみると、建物外側面では各段の下段を小口積み、上段を長手積みに(写真32上)、建物内側では逆に下段を長手積み、上段を小口積みとしており、全体ではイギリス積みの構築法を取っている。煉瓦基礎内部の構築は小口積みを基本としているようである(写真34)。

建物基礎のうち、側柱・外壁部分は、建物外縁にあたる北縁辺および西縁に張り出し部を設けており(写真30・33)、北縁辺は約4.5m間隔、西縁は約3.3mである(煉瓦積み基底部測定。以下、特に断りのない場合は同様)。北西隅は西側と北側に張り出している(写真31)。各張り出し部は、幅約1.3m、張り出しは約50cmである。張り出し部分に側柱が位置し、建物内部は外周部の張り出しに対応して通り柱基礎が設けられている。通り柱部分のコンクリート基礎は一辺約1.5m、煉瓦基礎は一辺約1.3mの規模である。側柱・外壁部煉瓦基礎最上段の幅は約90cm、通り柱煉瓦基礎基礎最上段は一辺約85cmの規模である。検出した基礎の上面はかなり削平が進んでおり、上部に構築された側柱や外壁の様子はあまりはっきりないが、張り出し部や建物内部基礎の上にはさらに煉瓦が2段程度積まれて柱基壇を構築しているようである。柱基壇は85×140cm、柱は一辺50cm程度と推定され、西側柱は西側へ、北側柱北側へ張り出し部を、北西隅は西側と北側へ張り出し部を有している。張り出しは約50×80cmと推定される。外壁の厚さは柱の規模と同様で、煉瓦基礎上面の内外端からそれぞれ50cm内側(煉瓦幅1つ分)に内側に壁の位置がある。

道路遺構および側溝 調査区南部の東西調査区で東西に延びるコンクリート道路遺構を検出した(第61図)。遺構の東半部は大半が撤去されているが、東西約51m分を確認した。道路遺構は調査区西半部ではほぼ東西方向であるが、調査区中央付近から緩やかに北側にカーブして、調査区東端部で南北道路に合流するものと想定される(南北道路自体は検出していないが、南北に延びる側溝を検出した)。既設施設撤去工



写真 38 外来診療棟新営工事地区検出道路遺構



写真 39 道路遺構および横断面



写真 40 外来診療棟新営工事地区検出建物
進入路遺構(上:東側面、下:北正面)



写真 41 外来診療棟新営工事地区検出道路
側溝

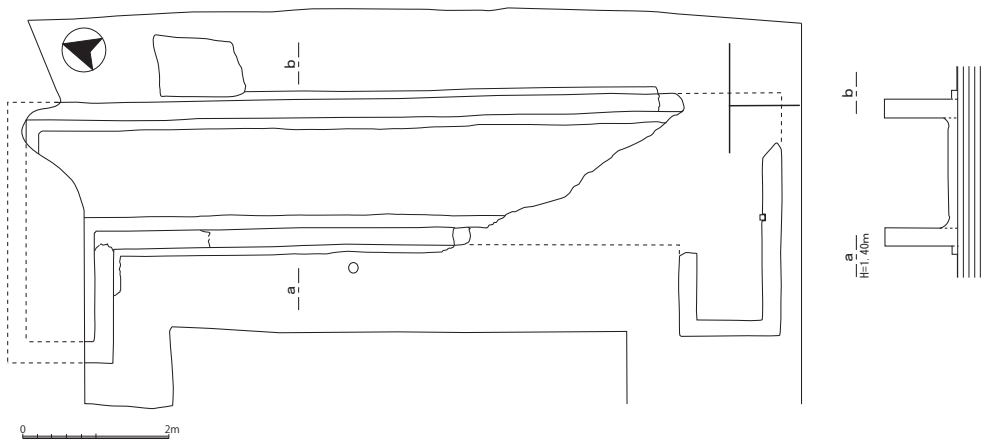
事に伴う旧原医研地区における試掘調査で検出した道路遺構（上述、103 頁参照）に連続するものと思われる。平面は 5 m × 5 m を単位としており、型枠によってコンクリートを流し込み、路面を造成している。調査区内では基本的に 1 単位を東西に連結する形で道路が形成されているが、調査区西端部では南側に 1 単位分のコンクリート面（残存しているのは北端部のみで、南側は削平され、規模は不明）を検出した。旧原医研地区の東半部では南北に 2 単位分のコンクリート面を検出していることから、本調査区の西端部から旧原医研地区東半部にかけては南北 2 単位分のコンクリート道路が敷設されていたのかもしれない。道路遺構は旧原医研地区検出の道路と同様の構造で、兵器補給廠の造成土上に若干の整地土を置き、その上に長さ 30 ～ 80cm、厚さ 20 ～ 40cm 程度の扁平な角礫を乱雑に敷いている（第 62 図）。さらに、大型角礫層の上部に長さ 10cm 前後の大型の円礫を 10 ～ 15cm 程度の層状に敷き、最後に円礫混

じりのコンクリートを流し込んで路面を完成している。

調査区西端部は、先に述べたように、南北2単位分のコンクリート面が認められた。旧原医研地区東半部でも同様で、南側の1単位については西端部が南東に向かって弧状に延びていること、南側に近接して旧11号館が位置していることから、本調査区西端部を含めて、旧11号館の玄関付近にあたっている可能性がある。この他に、東西調査区中央部（南北調査区の西側交点付近）で南北に延びる堤状のコンクリート構築物を検出した（第61図右）。道路遺構南端から道路主軸に直交してほぼ南北に延びており、幅約40cm、高さ約30cmの規模で、南北約4m分を検出した。南端部は削平されているが、旧11号館基礎撤去の掘り方に接していることから、旧11号館出入口への進入路の一部を構成した通路縁石のような構築物と推定される。遺構の東西いずれに通路が位置したか調査では明確にできなかったが、遺構基底部にコンクリート面が東西に広がっており、東側にはほとんど広がりを見せないことなどから西側に通路があった可能性がある。

コンクリート道路西端部では、道路に直交するように、コンクリート蓋で覆われた側溝を検出した。旧原医研地区で検出した側溝（第61図、写真22）と規模、構造とも同様である。側溝の外側幅約60cm、蓋は45cm×50cm（長辺が溝主軸方向）の規模である。側溝部分については掘削範囲外で保存可能であることから、蓋を除去して調査は行わなかった。

貯水施設遺構 調査区北西端部でコンクリート製構築物を検出した。遺構は調査区北側へ延びているため北端部の一部を確認することはできなかったが、平面形コの字状を呈するものと考えられる³⁾。本遺構は、南北部分を主要部として、南北両端が西側へ直角に屈曲する平面形状を呈している。南側の屈曲部付近や上面の大半が削平されているが、遺構の残存状態は良好である。南北主体部は内法で幅約1.5m、長さ約10mの規模で、南北の屈曲部はほぼ同じ規模であるが、北側屈曲部がやや規模が大きい。北側屈曲部は大半が埋まった状態であるため正確な規模を測定することができなかったが、幅約1m、長さ約1.5mの規模と考えられる。南側屈曲部は幅約90cm、長さ約1mである。床面はほぼ水平で、深さは約85cmである。床面の両壁際に幅約15cm、深さ約1cmの浅い溝を作出している。両側壁の厚さは約25cmで、床の厚さは15cmである。基礎の構造は十分に明らかにできなかったが、本遺構構築の手順はおおよそ以下のごとくと推定される。まず、兵器補給廠設置以前の水田土上に花崗岩風化土を主体とする造成土を20cm程度敷き、その上に栗石層を形成する。栗石層上



第 63 図 貯水施設遺構実測図 (1 : 100)



写真 42 外来診療棟新営工事地区検出貯水施設遺構



写真 43 外来診療棟新営工事地区検出暗渠状遺構・溝



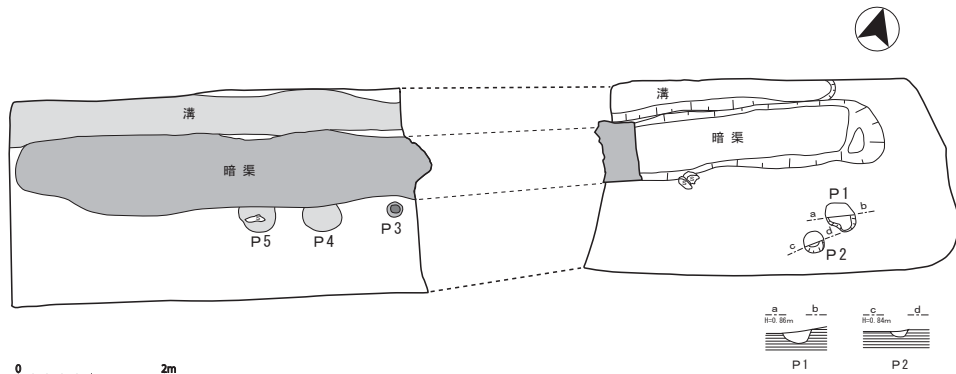
写真 44 外来診療棟新営工事地区検出暗渠状遺構・溝調査終了状況



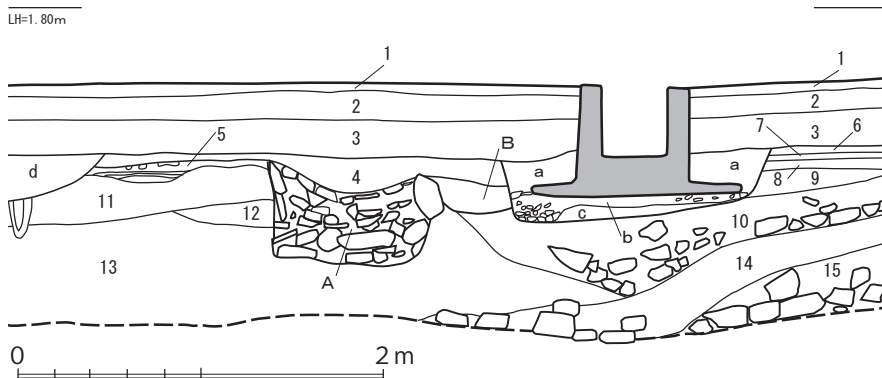
写真 45 暗渠状遺構断面

に木製型枠を構築してコンクリートを流し、基礎とする。コンクリート基礎の両端に両壁の型枠を設置してコンクリートを流し、最後に両壁の間に木製型枠を構築して床面を成形している。

本遺構は、当初、南北主要部分のみが露出し、水路の可能性を考えていたが、調査の過程で南側屈曲部が確認され、北側屈曲部についても北へ水路状の施設が延長されている可能性もないこと、床面はいずれにも傾斜していないこと、内部にまったく施設を有さないこと、埋積土は特別の用途を窺わせる状況は観察できなかったことなどから、貯水用の施設である可能性が高い。出土遺物がまったくなく、現状では本遺構の構築年代は不明である。しかし、床面上に使用に伴う堆積土が認められないこと、内側の下半部にはかなりの部分には型枠の一部と思われる平板が残存していたことな



第 64 図 暗渠状遺構・溝実測図 (1 : 100)
(図中の灰色部分は未調査であることを示す)



第 65 図 暗渠状遺構・溝周辺南北調査区西壁断面図 (1 : 40)
(Aは暗渠遺構埋土、Bは溝埋土である。)

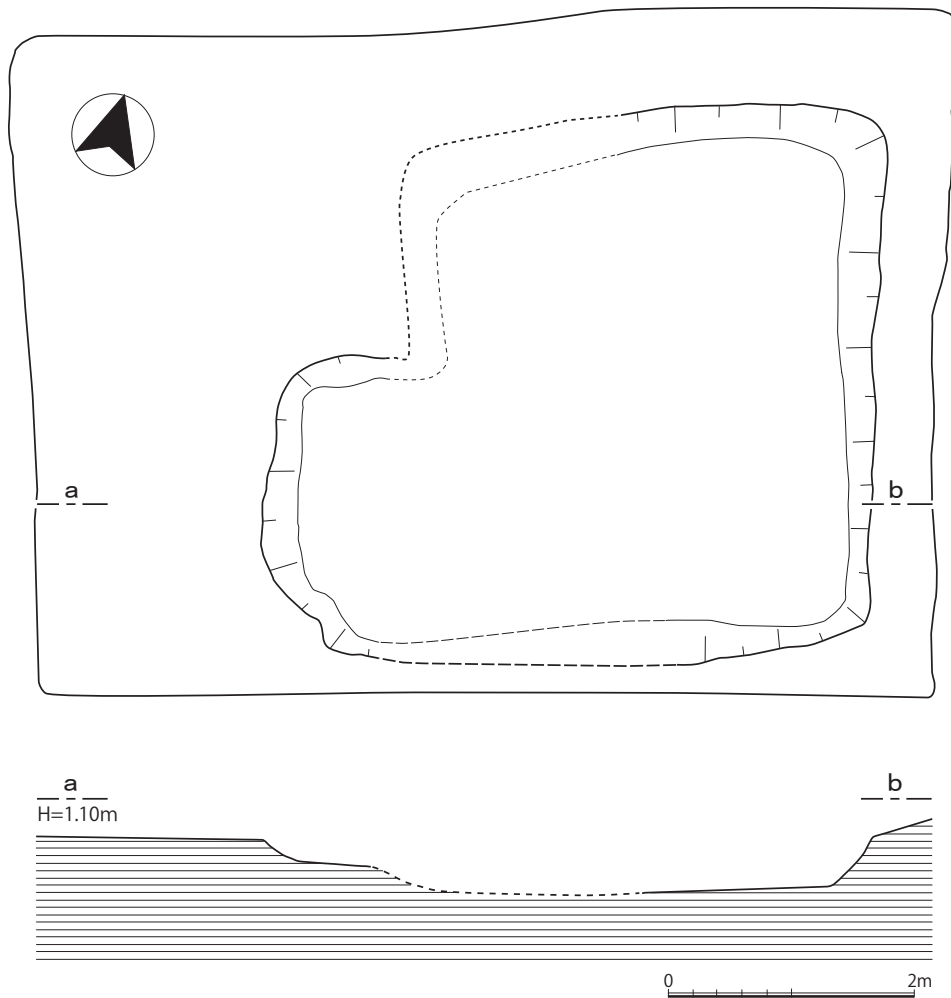
どを考え合わせると、構築後多くの時間を待たずに埋積された可能性が高い。

暗渠状遺構および溝 南北調査区中央部付近で、東西に細長い暗渠状遺構 1 基、溝 1 条を検出した。暗渠状遺構は内部に厚さ 1.5cm 程度のコンクリート片および灰色瓦片を充填していた（第 64 図、写真 43～45）。コンクリート片は瓦や壁材であり、灰色瓦片・コンクリート片に混じって磁器、鉄器などが出土した。両端は閉じており、掘り方は、幅約 80～90cm、長さ 11.9 m、深さ約 50cm の規模である。溝は暗渠状遺構に平行している（第 64 図）。両者の切り合い関係はやや不明瞭であるが、南北調査区の断面で見ると暗渠状遺構が先行しており、暗渠状遺構東端部でも同様である。北側は通路境界帯によって削平されているため、幅については正確な規模は不明であるが、幅約 60cm、深さ約 15cm の規模である。東端部はコンクリート片・瓦片充填溝の東端部付近で収束しているが、西側は調査区外に広がっており、長さは不明である。現状で、東西 11.2 m の長さを確認した。埋土中からは出土遺物はなかった。

暗渠状遺構は排水機能を持つものと推定される。暗渠状遺構と溝は切り合い関係を持つが、溝構築時およびその後も暗渠状遺構は機能していたものと思われる。暗渠状遺構の南側では近接して柱穴あるいは小土坑を 5 基検出した（第 61 図 P1～P5）。P2、P3 は直径 25cm 前後で、木炭が充填されていた。P3 は掘り方中央の直径約 15cm に木炭が集中しており、柱痕と思われる。P1、P4、P5 は長径 40～50cm の平面楕円形もしくは不正円形で、柱穴あるいは小土坑と思われる。P1、P2 については半分調査を行ったが、いずれも深さ 10cm 程度であった。P1～5 は配置や間隔に規則性がないが、遺構検出が十分に行えなかったことなどを考慮すると、暗渠状遺構上に何らかの構築物（屋根など）が存在した可能性がある。

木炭充填土坑 南北調査区北部で木炭充填土坑 1 基（1 号土坑）を検出した（第 66 図、写真 46・47）。平面は大略隅丸方形を呈し、南西部に長方形の張り出し部をもつ。土坑主体部は、東西約 4.2 m、南北約 4.5 m、深さ約 40cm の規模である。南西部の張り出しは、東西約 90cm、南北約 2.5 m、深さ約 25cm の規模である。埋土は締め具合や粒度などから大きく 2 枚に区分可能であるが、基本的には木炭粒を主体に、灰、土混じり黒色土である。埋土中から、磁器片、鉄器、靴などが出土した。床面が赤く焼けている箇所も認められ、焼却穴と推定される。

そのほかの遺構 調査区北部の東西調査区西半部北壁で小型土坑 1 基（2 号土坑）大型土坑 3 基（3～5 号土坑）確認した（第 57 図 8～11）。断面で確認したのみであり、平面形は不明である。2 号土坑は断面皿状で、幅 90cm、深さ約 20cm の規模である（写



第 66 図 木炭充填土坑実測図 (1 : 60)

真 49)。埋土は暗褐色粘質土、黒褐色粘質土を主体とし、床面上に焼土層が堆積していた。2 号土坑の西側 2 m に 3 号土坑が位置する。3 ～ 5 号土坑は調査区西半部に位置し、隣接して構築されている。いずれも幅約 2 m で、断面碗状を呈する。深さは、3・4 号土坑が約 50cm、5 号土坑が約 75cm の規模である。埋土は暗褐色粘質土を主体とし、3・4 号土坑は底部付近に木炭層や焼土層が認められた。断面では明確な遺物は確認できなかった。また、埋土上部には瓦小片が多数包含されていた。土坑の性格は不明であるが、焼土を含むものについてはゴミ焼き穴などかもしれない。

小 結 調査で検出された遺構のうち、煉瓦建物基礎は旧医学部 11 号館に比定さ



写真 46 外来診療棟新営工事地区検出大型土坑



写真 47 外来診療棟新営工事地区検出大型土坑調査終了状況



写真 48 外来診療棟新営工事地区検北側東西調査区全景

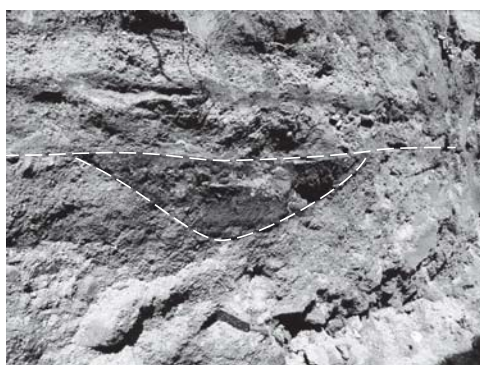


写真 49 外来診療棟新営工事地区北側東西調査区北壁断面土坑検出状況（破線）



写真 50 共同溝敷設地区（左端）、外来診療棟新営工事地区（暗渠状遺構）出土遺物



写真 51 外来診療棟新営工地区（木炭充填土坑）出土遺物

れるもので、旧広島陸軍兵器補給廠建物（以下、兵器補給廠）である。道路遺構についても旧原医研地区で検出した道路遺構に連続するもので、兵器補給廠関連遺構と判断される。旧医学部 11 号館の北側の東西道路と推定されるが、広島大学所有の建物配置図（1957 年、広島大学医学部移転当時）等では道路が記載されていないため、確認できない。道路遺構東端部で確認された側溝は、東西道路に交差する南北道路に併設されたものと想定される。内部の調査を行っておらず、時期は不明であるが、第 2 次世界大戦後の遺構の可能性もある。検出面や出土遺物などから、暗渠状遺構、溝、木炭充填土坑（1 号土坑）についても兵器補給廠関連のものと推定される。2 ～ 5 号土坑は出土遺物がなく、時期を特定できないが、いずれも兵器補給廠造成土上面からの掘り込みであり、兵器補給廠関連の遺構と考えられる。

兵器補給廠敷地は、大半が元々は水はけのあまり良くない水田であったと推定され、建設に当たってまず大規模な盛土（以下、兵器補給廠造成土という）が行われている。これまでの調査や今回の調査で霞地区のほぼ全域で 80cm ～ 1 m の盛土を行っていることを確認しており、今回の調査地区では平均して 80 ～ 90cm の盛土が認められた。この盛土上に数枚の整地土が認められる部分が各所に認められた。整地土の多くは炭混じりの黒褐色～暗灰褐色土とマサ土混じりの褐色～黄褐色砂質土で、複数時期の堆積物と推定される。最上部の整地層の上に数枚の盛土層（整地層）が認められ、それらの整地層は広島大学移転後のものと推定されること、兵器補給廠造成土上の整地土から出土する陶磁器類は 1945 年（昭和 20）以前のものであることなどから、最上遺構面は第 2 次世界大戦終戦前後時期が想定される。建物基礎、道路遺構、側溝はこれらの整地面との関係は明確にはできなかったが、暗渠状遺構、溝、木炭充填土坑、大型土坑については、ある程度を確認することができた。暗渠状遺構および溝付近では、兵器補給廠造成土上に 2 枚の整地面が認められた。兵器補給廠造成土上面を第 1 遺構面とすると、合計 3 枚の遺構面を数えることができ、暗渠状遺構は第 2 遺構面（遺構面の数字は下部から数える、以下同様）、溝は第 3 遺構面から掘り込まれている（平面的にも切り合い関係が確認できる）。暗渠状遺構に隣接する P1 ～ 5 は暗渠状遺構と同一面から掘り込まれたと思われる。木炭充填土坑周辺では 6 枚程度の遺構面が確認され、土坑掘り込み面は第 4 遺構面で、掘り込み面下に 2 面の遺構面を認めることができる。今回検出した遺構の前後関係等については明らかにすることはできなかったが、構築時期には差があることが想定できる。

また、兵器補給廠造成土の直下には暗灰色粘質土が堆積しており、江戸時代中期以

降利用されてきた水田などの堆積土と推定される。堆積層中から磁器片などが出土したが、時期の特定できる資料は認められなかった。これまでの出土資料を見ると、江戸時代中期を遡る資料は認められない。

4) レジデントハウス・ゲストハウス新営工事

所在地 広島市南区霞1丁目2番3号

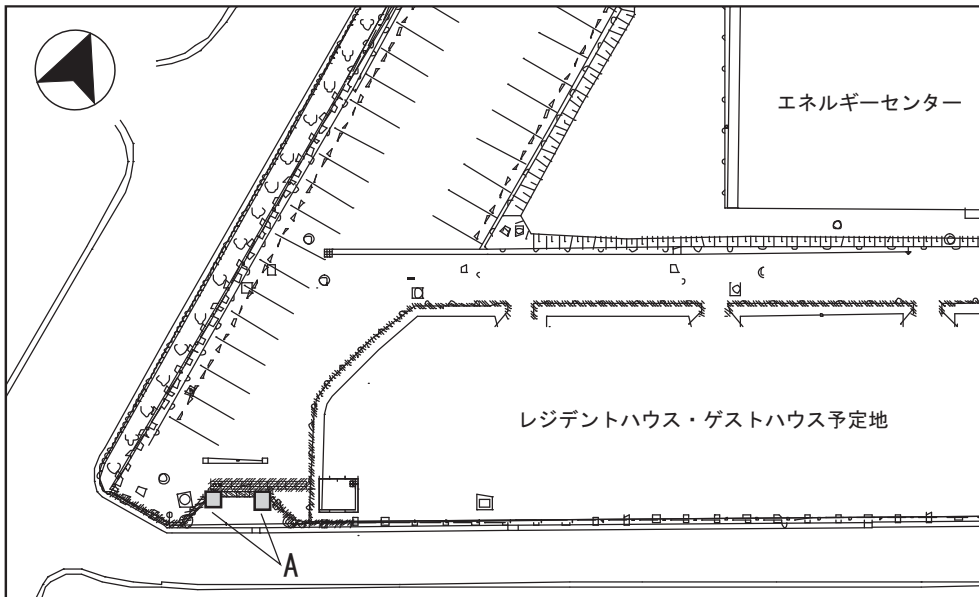
調査期日 2010年2月4日・5日

調査面積 約50㎡

調査者 藤野次史

調査概要 レジデントハウス・ゲストハウス新営工事に先立って、工事車両等の進入口を確保するため、敷地南西隅に所在する入口部撤去することとなり、これに伴って調査を行った。

現状は、南西隅入口は入口東西に石製門柱が設置され、門柱に接続する形でコンクリートブロックによる外壁が続いていた（第67図、写真50）。門柱は花崗岩製で、断面は正方形、上端は角錐を呈している。一辺約36cm、高さ約1.9mの規模で、表面は古色を帯びており、旧広島陸軍兵器補給廠関連の遺構である可能性が推定された。現状を記録し、表層土を除去したところ、地表下約20cm付近で門柱を設置した当時



第67図 レジデントハウス・ゲストハウス新営工事（門柱撤去）位置図（1：600）
（図中のAが石製門柱）

の地表面が露出するとともに、門柱基礎上面が確認された。門柱基礎はコンクリートで、一辺が95～100cmの規模であった。さらに、基礎の周囲を掘り下げ、門柱を吊り上げて、移動した。基礎の深さは約50cmで、コンクリート基礎面には小角礫が敷かれていた(写真51・52)。門柱移動に伴う掘削において、そのほかの遺構・遺物等は確認されなかった。

なお、撤去した石製門柱は、レジデントハウス・ゲストハウス新営工事が終了するまで別所で保管し、工事終了後、原位置に近い場所に再配置し、門柱として利用する予定である。

5) 駐輪場改修・新営工事

所在地 広島市南区霞1丁目2番3号

調査期日 2010年2月17日・24日

調査面積 142㎡

調査者 藤野次史

調査概要 駐輪場改修・新営工事に伴って調査を行った。工事予定地は4ヶ所であるが、現在構築物がなく、新たな掘削を伴う解剖センター西側および医学部基礎第2研究棟北側の2ヶ所について立会調査を実施した。

解剖センター西側駐輪場 南端部の駐輪場上屋基礎でコンクリート面が露出したことから、霞地区の配管図面の確認を依頼したところ、共同溝が設置されていることが判明した。詳細に検



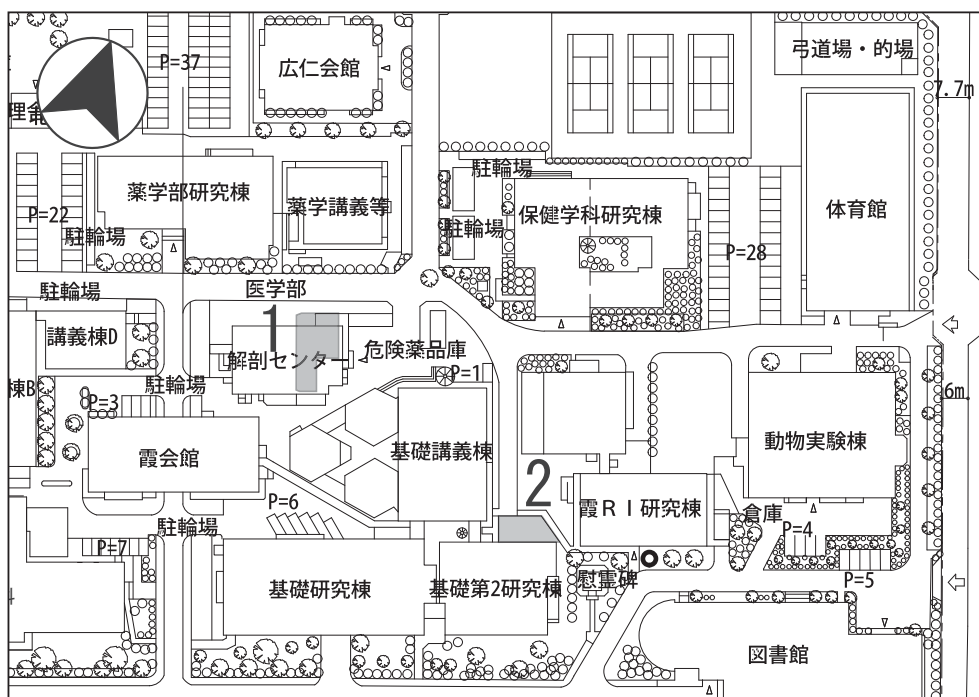
写真50 レジデントハウス・ゲストハウス
新営工事地区門柱全景



写真51 門柱基礎露出状況



写真52 門柱底部基礎栗石接合状況



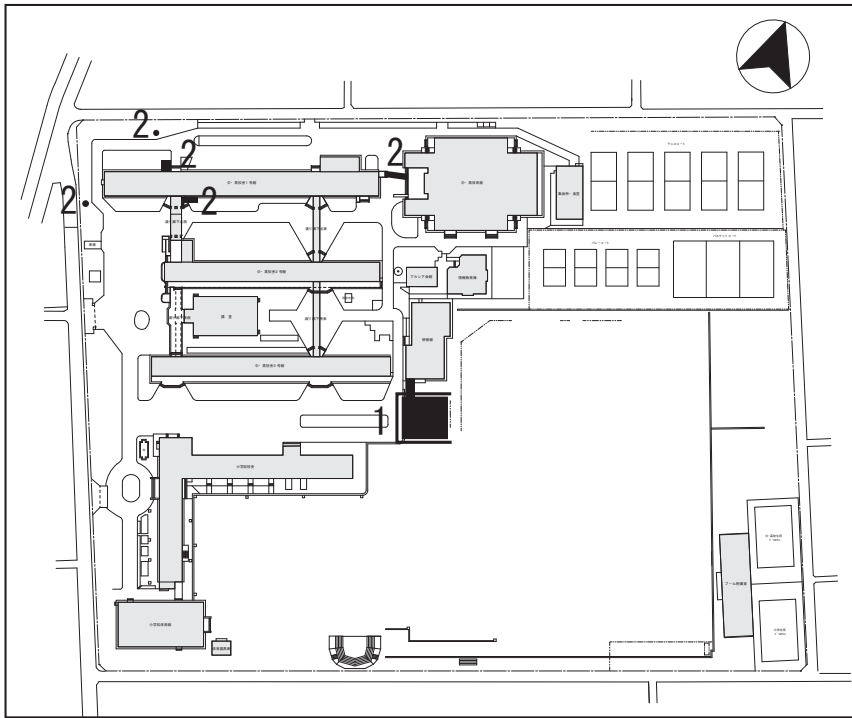
第 68 図 駐輪場設置工事位置図 (1 : 2000)
 (1. 解剖センター西側駐輪場 2. 医学部基礎第 2 研究棟北側駐輪場)

討した結果、工事対象地区の大半は共同溝およびその掘り方内に含まれることが判明し、工事を行って支障ないことを確認した。

医学部基礎第 2 研究棟北側駐輪場 本調査区についても調査途上でコンクリート構築物が露出したため、霞地区の配管図面と照合したところ、共同溝であることを確認した。配置調査区の大半は共同溝およびその掘り方埋土で、そのほかについても大半は比較的最近の工事による埋積土と考えられた。調査区西端部については共同溝掘り方の外側に位置しているが、遺構・遺物とも検出されなかった。



写真 53 医学部基礎第 2 研究棟北側駐輪場地区の調査完了状況



第 69 図 2009 年度翠地区の立会調査位置図 (1 : 3000)

(1. 附属学校部事務棟新営工事、2. 附属学校部中・高校舎 1 号館改修工事ほか)

翠地区 (広島市)

1) 附属学校部 (翠地区) 事務棟新営工事

所在地 広島市南区翠 1 丁目 1 番 1 号

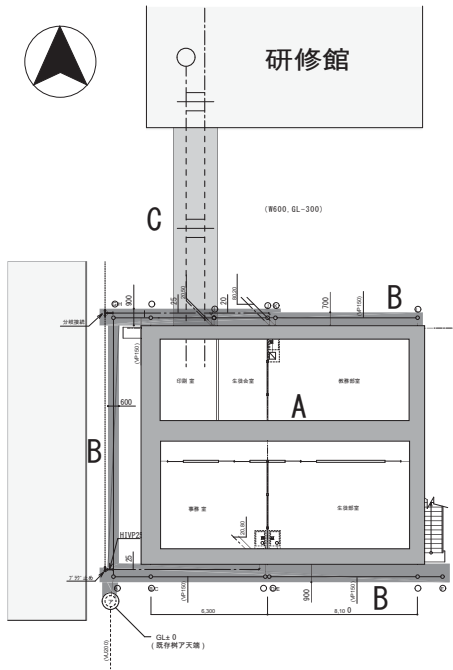
調査期日 2009 年 6 月 16 日・7 月 9 日

調査面積 195㎡

調査者 藤野次史

調査概要 附属学校部事務棟新営工事に伴って調査を行った (第 69 図 1)。調査対象地の現状は附属学校部グラウンド (中・高校) の一角であり、構築物等は存在していなかった。

事務棟基礎工事および電気配管、給排水配管布設工事について立会調査を実施した。事務棟基礎は平面日の字状を呈し、東西約 16.5 m、南北約 14.5 m の規模である (第 70 図 A)。基礎掘り方は東西基礎が幅約 2 m、南北基礎が約 1.8 m の規模で、深さ 60cm まで掘削した (写真 55)。調査区の全域で、地表下 40 ~ 50cm 以下において旧



第70図 事務棟新営工事地区平面図（1：400）

（濃い灰色部分が掘削範囲を示す。A. 建物基礎、B. 給排水管布設、C. 電気配管敷設）

砂質土を確認した。給排水配管は、事務棟基礎の北側、西側、南側を取り囲むように配置されている（第70図B）。配管掘り方は南壁沿いが幅90cm、北壁沿い西半が幅90cm、東半が幅70cm、西壁沿いが幅60cmの規模であり、掘削深度は50～85cm、既設雨水桝接続部では地表下1.3mまで掘削した。

地表下40～50cmで旧広島高等学校建設に伴う造成土と思われる橙褐色～明橙褐色砂質土を確認した。事務棟南側の掘り方部では長さ30cm前後の角礫が多数出土したが、石組みなどは確認されなかった。近接部に何らかの構築物が存在したのかもしれない。電気配管は事務棟北東部に北側の研修館から直線的に配置する（第70図C）。掘り方は幅60cm、深さ30cmの規模で掘削した。いずれの地区でも遺構・遺物とも検出されなかった。

2) 附属学校部（翠地区）中・高校舎1号館改修工事ほか

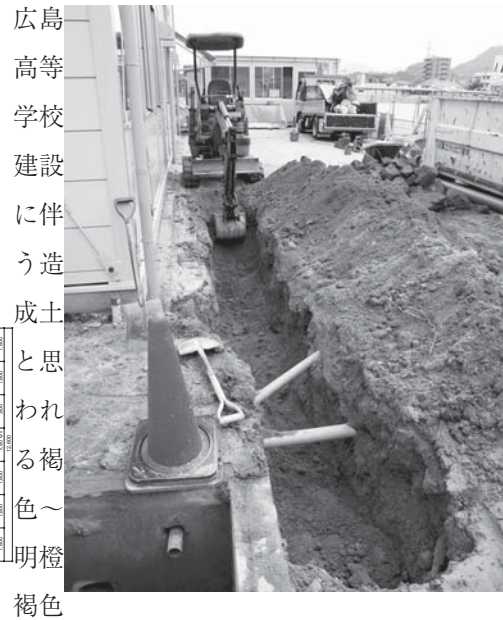
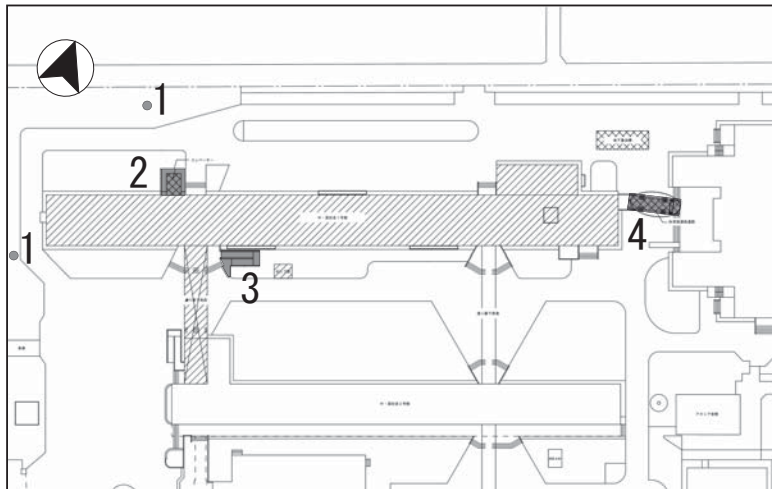


写真54 事務棟新営工事南側給排水管掘り方掘削状況



写真55 事務棟新営工事建物基礎掘り方掘削状況



第 71 図 中・高校舎改修工事地区の立会調査位置図 (1 : 1500)

(1. 電信柱設置工事、2. エレベーター新設工事、3. 玄関スロープ新設工事、4. 体育館連絡通路工事)

所在地 広島市南区翠 1 丁目 1 番 1 号

調査期日 2009 年 6 月 19 日・8 月 6 日・9 月 7 日・12 月 17 日

調査面積 約 125㎡

調査者 藤野次史

調査概要 広島大学附属学校部(翠地区)中・高校舎 1 号館改修工事他に伴って調査を行った。工事予定地 7ヶ所のうち、調査が必要と思われる電信柱設置工事地区、エレベーター新設工事地区、玄関スロープ新設工事地区、体育館連絡通路改修工事地区の 4ヶ所について立会調査を実施した(第 71 図)。

電信柱設置工事地区(第 71 図 1) 附属中・高校舎 1 号館改修工事のための仮設電柱を設置した。設置箇所は 2ヶ所で、直径約 40cm、深さ約 1 m の規模で掘削を行った。上層より、暗褐色砂質土、黄褐色砂質土、暗褐色砂質土、灰褐色砂質土の順で堆積層が認められたが、遺構、遺物ともに認められなかった。

エレベーター新設工事地区(第 71 図 2) 中・高校舎北西入り口に接してエレベーター基礎の掘削を行った。南北 5.1 m、東西 4.8 m、深さ約 1.8 m まで掘削した。校舎北端から北側約 2.2 m は校舎根切(基礎掘り方)で、根切は深さ約 1.6 m まで掘削が行われていた。また、エレベーター基礎東側に接する既設出入口階段部の基礎掘り方が階段から西 1 m 程度まで認められ、深さ約 1.5 m まで掘削されていた。既設の校舎および出入口階段の掘り方以外の部分は基本的に堆積層に乱れはなく、地表下 40cm

前後に厚さ 40～50cm 程度の黄橙色砂質土が堆積し、以下、淡黄褐色砂質土、灰黒色砂質土、黄色味のある暗灰褐色砂質土の順で堆積していた（写真 56）。淡黄褐色砂質土以下はいずれも目の細かい砂質土で、海成層かもしれない。遺構、遺物とも検出されなかった。

玄関スロープ新設工事地区（第 71 図 3） 玄関にスロープを設置するため、東西約 3.9 m、南北約 9 m の規模で掘削を行った。掘削深度は約 65cm である。調査区北側の校舎南端から南側 1.2 m 前後は、建物根切（基礎掘り方）で、すべて基礎埋積土であった。調査区の南側にも配管布設に伴う掘り方が一部に認められたが、その他は堆積層に乱れはなく、上層から、表土層、コンクリート層、暗褐色砂質土、灰黒色粘質土（砂質強）の順で堆積層が認められ（写真 58）、最下層の灰黒色粘質土はガラス片、瓦片、礫な



写真 56 中・高校舎改修工事エレベーター新設工事地区堆積層



写真 57 中・高校舎改修工事玄関スロープ新設工事地区掘削状況

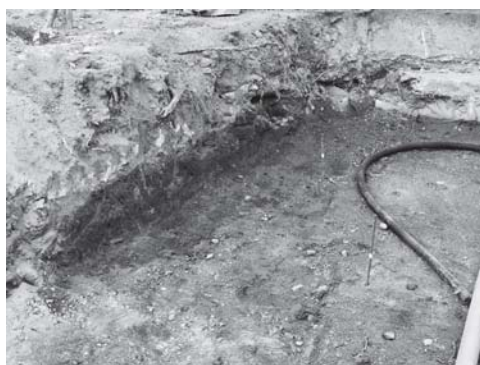


写真 58 中・高校舎改修工事玄関スロープ新設工事地区堆積層



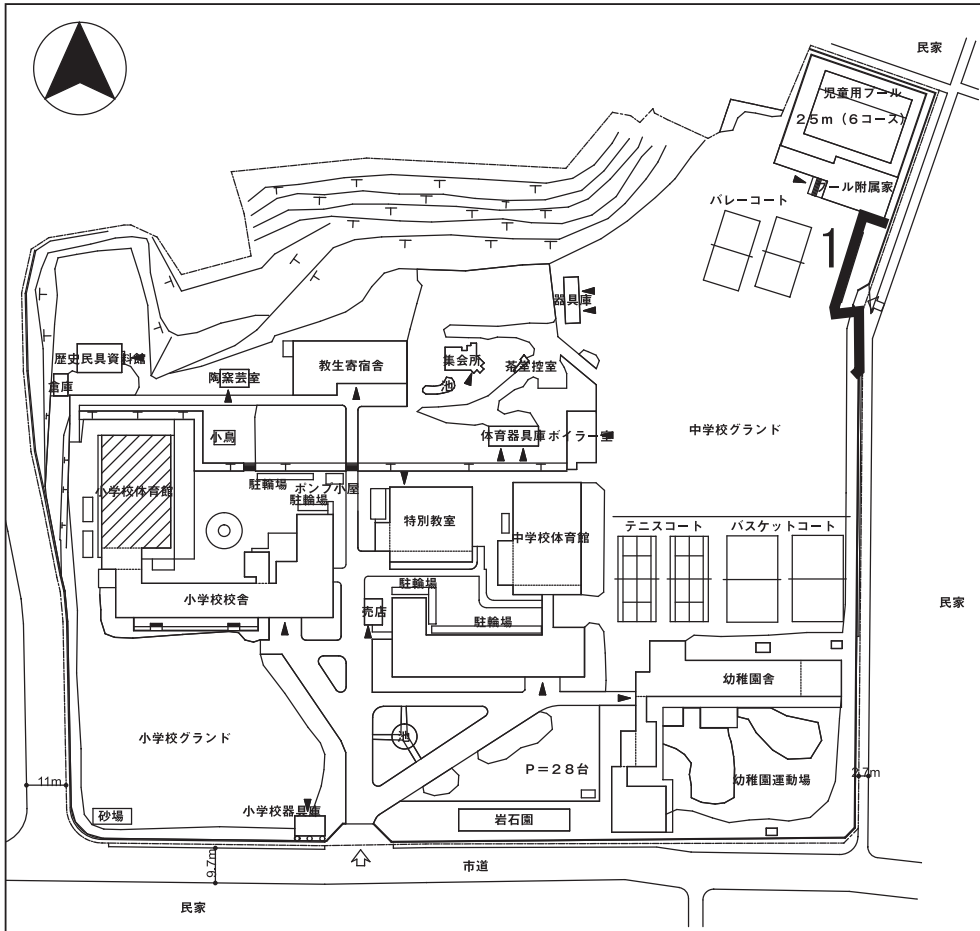
写真 59 中・高校舎改修工事体育館連絡通路改修工事地区堆積層（体育館側）

どを包含していた。第2次世界大戦後の堆積物と思われる。遺構・遺物とも検出されなかった。

体育館連絡通路改修工事地区（第71図4） 渡り廊下基礎柱4ヶ所と体育館側の補助基礎部分の掘削を行った。掘削深度は70cmで、アスファルト、アスファルト基礎の下層に、暗灰褐色砂質土、褐色砂質土、礫混じり暗黄褐色砂質土の順で堆積が認められた（写真59）。遺構・遺物とも検出されなかった。

三原地区（三原市）

1) 附属学校部プール南側排水管新設工事



第72図 2009年度三原地区の立会調査位置図（1：2000）
（1. プール南側排水管新設工事）

所在地 三原市館町2丁目6番1号

調査期日 2010年2月18日
(3月1日～4日)

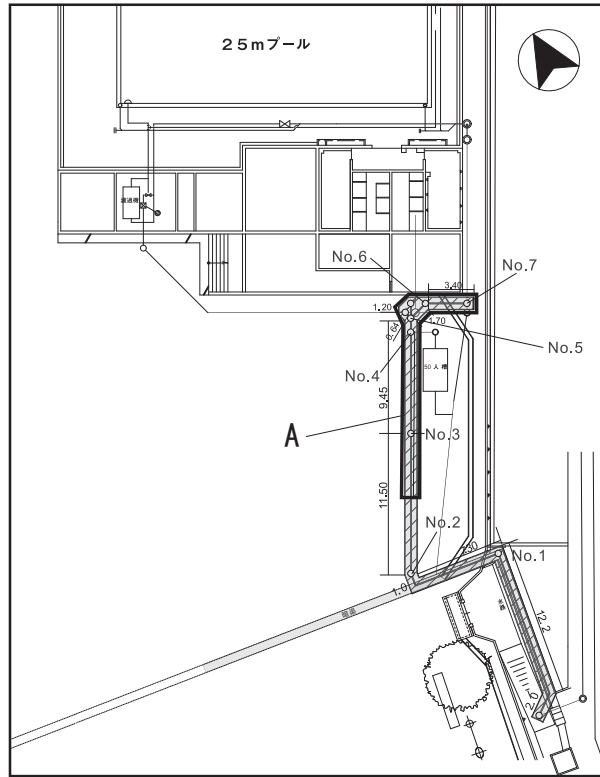
調査面積 約41㎡

調査者 藤野次史

調査概要 附属学校部敷地北東端部に位置するプールから公共下水に接続する排水管敷設予定路のうち北側約半分(第73図黒枠部分(A))について立会調査を実施した。

調査区北端部東西調査区(No.6-No.7柵)はプール沿いに位置し、上層より、暗褐色～暗灰褐色砂質土、コンクリート面、マサ土と暗灰褐色土の互層が堆積しており、プール基礎掘り方内の堆積土と判断された。

南北調査区は幅約1m、長さ約13.5mの規模で、北端部で約1.0m、南端部で約1.3mの深さまで調査した。南北調査区北部(No.3北側-No.4)では調査区北端部から南北約7mの大型土坑を検出した(写真61)。表土層は約30cm程度で、暗灰褐色砂質土であり、その直下から大型土坑は掘り込まれている。土坑底面は確認していないが、堆積状態より掘り込み面より約1mの規模と推定される。底部に厚さ20cm程度の木炭層が堆積しており、土坑埋土、瓦、磁器、煉瓦、ガラスなどを包含している(特に下半部から多く出土した)。磁器は昭和20年以降のものを中心とするが、明らかに昭和50年代以降のものは混じっていない。焼却場を兼ねたゴミ捨て穴と推定される。南北調査区北端から南側7m付近から堆積層の様子が大きく変化し、表土(暗灰褐色砂質土)下は全て黄褐色マサ土の堆積である(写真62)。現在の運動場の基礎をなす盛土と思われる。



第73図 プール南側排水工事平面図(1:600)
(灰色部分が掘削範囲であり、黒枠部分(A)は立会調査範囲を示す。図中Noは柵である。)

検出した大型土坑のほかには、遺構・遺物とも検出されなかった。土坑の年代は出土資料の主体から見て第2次世界大戦以降と推定されるが、出土磁器には昭和時代前半に遡る可能性のあるものも散見され、掘削時期は昭和20～30年代に遡るかもしれない。

なお、立会調査を実施しなかった排水管敷設予定路南側約半分については、暗渠排水に接するNo.2 桝周辺で地表下約2.1 mまで掘削した。堆積層は、地表下約1.2 m付近から黄褐色マサ土から灰褐色土に変化する。No.2 桝のすぐ南側が石垣であり、暗渠および暗渠の東側ではほとんど掘削を行わなかった。したがって、上記の灰褐色土の広がりには十分に確認できず、堆積の時期や遺物の有無等については現状では不明である。排水管は、暗渠内をNo.2 桝の南側で東側に折れ、東側7.3 mで暗渠東端部No.1 桝に接続する。さらにNo.1 で再び南方向に屈曲して公共下水の桝に接続している。暗渠内では暗渠床を配管幅で掘削し、暗渠の東側は運動場から学外へ通じる南北通路東法面（石垣）裾を配管幅で掘削して、配管を埋設したが、掘削は前者では暗渠構築土内、後者では石垣構築土内に収まっていた。公共下水桝は南北通路内にあり、公共下水桝周辺については通路および石垣を一旦撤去して配管を行った。掘削範囲の下部で暗灰色土を確認したが、暗渠北側のNo.2



写真 60 プール南側排水管新設工事全景



写真 61 プール南側排水管新設工事 No.3・No.4 桝間掘り方（北部）堆積状況



写真 59 プール南側排水管新設工事 No.4・No.2 桝間管掘り方（中部～南部）堆積状況

榊付近で確認した灰褐色土との関連は現時点では不明である。南北通路が坂を形成しているので、暗灰色土の上面の地表下からの深さは一定ではないが、公共下水樋の部分で地表下約 80cm である。

3. 調査の成果

2009 年度は、霞地区、東広島地区を中心に、翠地区、三原地区で立会調査を行った。また、霞地区、東広島地区では試掘調査を実施し、多くの成果が得られた。とくに、霞地区では旧広島陸軍兵器補給廠関連と思われる建物跡、道路跡など、性格の明確な遺構がまとまった形で検出され、旧兵器補給廠の様相の一端が初めて明らかとなった。過去 3 年間の調査によって霞地区の広範な地域に関連遺構が残されていることが推定されるようになっていたが、きわめて良好な形で検出できることが明らかとなったことは重要な成果であった。今後、保存も含めて検討されるべきものであろう。

注

- (1) 旧広島陸軍兵器補給廠敷地は、広島大学霞地区全域および東側隣接地の中国管区警察学校、段原中学校（旧広島県警察学校敷地）などに広がっており、現在も多くの遺構が残されていると推定される。また、中国管区警察学校には弾薬庫周囲の土塁が残されている。旧広島陸軍兵器補給廠は大阪陸軍砲兵工廠広島派出所に起源をもつ。同派出所は 1905 年（明治 38）に広島陸軍兵器支廠に昇格、1906 年（明治 39）に現在の霞地区に移転し、順次施設を建築した。1940 年（昭和 15）に広島兵器補給廠と改称したのち、終戦を迎えている。これまで広島大学霞地区で検出した遺構は広島陸軍兵器補給廠関連の遺構を中心としていると推定されるが、広島陸軍兵器支廠期の遺構も含まれている可能性が強い。現状では詳細な時期比定はできないこともあり、当面の間、当該検出遺構については広島陸軍兵器補給廠関連遺構として報告する。
- (2) 広島大学大学院文学研究科三浦正幸氏の教示。
- (3) 旧原医研設置当時にはコンクリート製溜池が中庭に存在し、その後埋められたようである。その位置を正確に特定することはできないが、広島大学財務・総務室三浦敏明氏の教示による旧原医研溜池の位置と本遺構のそれはほぼ一致する。
- (4) 2012 年度に本遺構の北側隣接地において立会い調査を行ったが、延長線上で遺構を確認することはできなかった。本遺構の調査時に遺構北西端を確認できなかったが、北側への遺構の広がりがないとすれば、南北対称形を呈していたと想定することが最も妥当であろう。

引用文献

藤野次史 1997「鴻巣北古墳の調査」『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報 XIII』広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会、55～58 頁。